有入用
女重寶

序

書肆玉叢堂求版小竹田寸木子女重宝記五巻あり女日用は程こもちゐにあはせたれどもそはさ流行ふるくるくまを多しとゐ世間を今見るのおもひありいそぐ性偏人我の相あらく貪欲ふて理を志らず直ぐで拙きのハ女なりとと通好ゐ徒無ふ出しを実ふも少ていうみをたゞ真きをしらしめ拙きまを主て風雅に乾ゐらしめん役ふ法草紙を著せしよし今其謬を行し足ざるを補ひあゝ直に梓行せん需にしたがひおしく筆戈加ゑて

巳丑孟冬

高井蘭山翁滇

女重寶記　一の巻　女中第一あくの事

目録

一　女八人目のたぐまれなる事
二　男の中うぶ中うあるべき世流の癖の事
三　女ぶさだめ付こう風俗の評判
四　女たが物ぐうあるべき法ぐ心ぐあひ事
五　女おとばつうひ付こう御所やまと祝儀ちいこう
六　女けしやうの巻
　髪のあぶらけの事　髪のゆひ花をあそび業　髪のあらたこう
　髪のたゆる業　髪の中ひゆう　ひらひのつくりゆう
　眉はくりゆう　白粉　紅つけゆう
七　衣まの法はあるべき当世ためゆうふさ　帯の事

女重寶記　一之巻

一　女八人のたぐまれなる事

乾坤世ごとに別国常ためをなすべし　七代の男女なりそもそも
七代目の伊弉諾伊弉冊尊二神ようの男女と別出て天の浮橋のけこまて
肇て婚合し女と男をせのふ女と天照皇太神の五男の姉
君ふ流せの流ぐ子ひろかが母きうるゆくまま海中あまてる太神と
中又目の神ともゆ孝りて言る天ゆ系をたしめのふ男子天陸天ゆ太ろし
めし地神の祖と仰ぎあひ人ゆ世をいとものかこと法人ゆやまひ者ることされば
女八天照太神のあぐれなる道ぶ神代ゆ法人ゆ世とあるてもと代の女ゆ人公書ふ
ようて彩あるべき世のすぐ人ゆ時ゆ多びて女の心法ゆにあるべくあるべく人ゆ情ら姫
ゆをゆ惜しきこうゆいろかぐうて歌ゆ心ゆやはきこゆ人ゆ情をあるべき女人ゆ
地獄の使ゆ仏のたゆをもちゆ面ゆ菩薩ふ似て門ゆ夜叉のやと歌ゆるも極さ

町人
公家
武家
百姓

火事
嵐女
傾城
後家

こゝに女子ありてうづくれば不孫あるとゝ孔子もの〻ひ〻給ひ後世まで形
ゆ夜の首ようひがるる女のゝあれば今流事おいて女の心〻うべきあれば人〻
んがけたゝなこのりをもあ〻いはすあやのゝとあり神道の正直ふをうあひあ世
ん心をあれだたゝなまねども嫉妬の心ふあ〻欲とくあ〻情ふ〻物を嫌こん
も優〻〻成のゝ女人年ふあ〻いまぐ嫁せぬまゝ世をそたち才を恨ていた孫ども
んをたゝなむ和もあれば考へけせをうちて後ちあ〻心あ〻くなり為びあく
ろくびあどのあぐ名をこてられやぐ自まて夫おゝ心の神といれ人よ火車し
よだるゝたゞひかしまことにあさ清きこゝろあるべし

二　分の貴生あるべふ白花の魚れの

子たゝおあさ中にうけて男子ようあ女子ハ親の恩恵深きの為ふいまゝに育あげ
嫁まゝふなるまゝふ人て義を義性義ら為ふとんまふ為び嫁し
ても姑の心をうひ夫の親をとる為ふあ〻八十六七の比労度の母ひをうびうふ

ものゝ労度の恥ハ我もあ〻びいつとなく見をかこおて親
たせおとゝ孫〻ていうまゝの色あゝ晴時ようあ強ハ出ざう〻とふむく絶ふ乗〻び
資汗出疲度不合おのうもあ〻ものるあ拭大の間一色おくもあ〻れるく
あとあ〻ハ我と云とあるそ〻者生〻てあ〻警師を祈て薬汗出ぬるに
白花患つとふ死ふ夫とあるを長〻義ハ為ふ為ふ考〻せ孫ぎうび祈医ふ得老あ〻

三　女おかさぐめ

天マの五穀を女神さ紀といふ大樹将軍の御養蚕ふ人の五労を云祝
云の夜函枕ハ向て五穀ある由為の名〻大花の御祭さ面為と云雅紀
義和ふ法新造百姓の御方又蔵鍵を云下女ふ藁鍵をとうするとふ義
あり町人の御内儀と云内の後利を活ると云ことゝ下ざ面の御嫁と云ふあれハ
子持といふ揚屋業屋の御火車といふ義為ふあ〻てあ〻ものきこゝろふの右あり
事為の御姫といふまゝあ〻なりて後宗和方ふて姫といひ大の為

とゝいづれもそれ〳〵のふこうるゐこと有ふる事もちがふかれたこゝろざしに俗をたゞ
もちがひあるべきれど喫ようの喫ふりにて我ようにぶ母れ人のふをゝ俗をたゞ
のふしをうまやさ母のくもゝ〳〵に俗にあらふべくに俗にふもちるまひのゆく
ろうゝあるる衣物をゝ衣のゝといふかわゝ衣着もそれくの俗ふ色ぬをし
と衣百石の奥方ふ石の奥方かまゝ奥母の中姫の町人支ゝを
稗を擬ふさしゝ〳〵もちがけあくあるゝ代びする女房八百奥母の江戸俗ゝを
まがふ程の衣装つゝ今れ世の風俗ゝかくのゝ〳〵それくの俗ゝ身乃
程をゝ〳〵ぬ母ゝ身のゝをゝ〳〵ぬふかあゝねゝ女ふ世ゝ人言ふゝあく陽
上ふゝきゝ母ゝ女ふ母ゝ〳〵ゝ母ゝ〳〵ゝ奥ふゝきゝゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ乃風
俗ゝ移ゝ世ゝきゝゝたるゝ世ゝんゝゝ母ゝ〳〵ゝ洋姫ゝゝゝ母ゝまゝ〳〵ふ
花の程ゝゝゝふゝ世ゝゝゝふれゝ花の風俗ゝ人ゝかゝゝゝ中ゝゝゝ衣物衣乃
ゝゝゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

うとめぐらす　ちうこうさのう

ひかりとしきのようかくぬのえりひろきさまへあさゆかたゝなこのわび

女中たゝなこてようゑ芸あゝます

あかくうの　ゑのようむの　紙ぎのする　源氏ゆうゑ百人一首　古今万葉の

義理をたるう　うちぬひのう　うみつむぎの　たてまるう　綿ぬきゆまるう

絵ぬき　花むすび　琴をんぞう　盤上の　番碁きくう　茶の湯をう

連歌をいとる　立花いけもする　髪ゆひ　女のまつげをまるう

ひかりはゝこでもあくかくまで　ゑのう　中よう　下の女中ごこ　世ゆかも　藝をうべし

せうゑ　ゑのうまつのあるう門のをきめあるう　才一の藝をうべし

女中たゝなこでもくうかくぬ藝

そうだん　ようりゆ　ぬうこされうりうこさみせん　女の才ゑ

ふようてゑらふもう　奏人の書ゑ　ゆどゝはうぎうたあゝびこと　ゆどふうんごん

すごゝ　ゝはめきてだゆと奏男めゝる　抱ゑゝこゝりかゝふも　女に仏合ぬ藝

をゑらふべゝ次第のう　仏あふと仏あゝぬるゆゑるのゑり

（八）女こゝだゝひのう　ゆらうやまゝこゝば

ゆうに　面ゑゝと云男人の古母　ゆゝ　おくゝまゝゝて　面ゑゝいとけゑ　兄時ゝ　ゝそび

藤をうゝ　ゆゝ　姫ゝ　若人の　ゝ　ゑのうに　宿ゆうゝ　ゆゝ　面ゑ　ゝうゝひのう　ゆ　をのゝし

ゆふ次ふ寺のゆゝうに　ゝ　ゝ　ゝ

さ分ちつゝむ

門のものいやしくといふべきを　家来又ハ下人といふあり

おくさのおちさのおくといふべきを　門役門方門番などいふなり

この又ちいさきといふべきを　家中の男のといふさゝり

りとよりといふべきを　元来の根元のといふ也さまゞ

うとねとといふべきを　以来の向後のといふ也さられ

よそ〳〵ゝ行くられまゝたを　死出〳〵迄死こられまゝたをいやく

同じくふぞんじまゝを　孫子子孫子々孫々といふもほこら

ようびのそうひとといふべきを　茶燭料菓といふうさ

ようくもあまりまとといふを　家ども門あといふ男ら〳〵

いろふまそあうりはたといふを　菓子に延ら去まゝたといふもおく

あるへむつらしきといふを　代物言也といふきゝにくし

おすぎあるれちりようしとふを　注せあるれ孫孫よきこのふぶんぎわくと
ものきこそまるくすぐすいふを　好物あれ飽食あるくとふふくそ〜
右の和いう紙もあれをこくくもうすにあるそびけさぐひおーたうちるべ〜
けわうふこひゆう・痩め・ものきと・おうく・ひどい・けびる・やく・いきぢ・きざ〜・
きのこをる・する・おるく・そすたゆ・おてれ・うゆけときのちゆ・こぐあごよれ
女中の一ごんものうふゆふあ〜ぐたし・あるくうの〜べ〜女のやう〜うる対といふ
一ふくもをきるひとうふ　一ふたうちをおぐちいふ一あ〜くをおむづうる
一稲るをおちぐまる　一おきるをおひうるる　一かみあらをけじすゆん
一のうめをけこ〜　一のるを　めす　一人どうひのふを　めす
一物まるをめ〜ゆぐる　一物くまるをたぐうく　一物ふのちまふをたぜんすぐる
一ひるゆをひるくぐ　一きトまんぐうを　ふまん　一ゆりきゆうを　ふまん
一うまとうふをおい〜れ　一あうくを　けひろい　一ものぐるい　とる

一うひあせハ　うひいるゆひ　一もやげハ　おうや　一あ〜を　おうゆ〜
一物のうふを　うけをえん　一うをハ　とく　一ものむつにをけきぐんのき
一稲つうるを　おぬる　一たううるものかるをうあく一ゆうこうを　うゆつく
一ちんトものハ　一物　一花一ちんを　ひとりを　一ちゆ升を　ひとます
一一ちんを　ひとう　一ふううを　一ううね　一大小用にゆをうらふゆく
一ものハ　うんぎる　けれいうもあれぐるけさぐひおーたうりのふべ〜

ちふげんの疾いみことば

さるのくうるくたるくうるくうるうすいさむるうをりどけやるおくる
あくちまぬきらふむえん　ちうぐくけさぐひのとぐつとむべ〜
やまとあをば　きるるきるるのあをものきるるぐ
一こをぐハ　ごゆくとふ　一ちうハ　けあうといふ　一おびハ　おりぐ
一ものぐハ　ものりぐ　一ようぎハ　ようるのの　一うゆハ　うちゆう

一ごんすかや　とんちゆう
一蚕にハ　おいろ
一こめハ　ちまき
一さけハ　九こん
一こぬかハ　まちうね
一ちまきハ　まき
一あつきのちハ　あつのかちん
一やしぶしのちハ　やしぶしちん
一たうきびのちハ　のろにし
一さしげのつゝこ　ふぢのまる
一あさハ　をゝなへ〳〵
一ゐれこそハ　おぢや
一ひやむぎハ　きうり
一でんがくハ　おでん
一あづきハ　あゝ
一ひゝなハ　あまむし
一あをのの　あをびハ　かす
一ちさハ　おそびろ
一大こんハ　うらのの
一かぶのハ　うゝ〳〵
一つゝらじハ　つく
一さけのこハ　たけ
一ずいきぢハ　つゆのあけ
一ちほハ　あをこのまる
一こんにゆハ　おうぐ
一きうりハ　おうぐのうら
一まめのこハ　きかこ
一ちゝこハ　ちゝ
一ちゝこハ　ちゝ
一ちゝこハ　ちゝ

一ちゝはは　祝のゝ仕
一ますがた　あうまる
一くぢらハ　おさゝう
一たこハ　たゝ〻
一うなゐハ　かゝ〻
一いびすハ　月よ
一金毫賞ハ　百せ
一ますハ　四ちゝ
一あのべハ　くろ
一せつうハ　うぐひす
右御所のことをづりひるれを北下るも知らるこまわ〻

(六) おけしあうの毫

一ふなハ　やきぶる
一うぶのこハ　うぶ〻
一ちゝ〻ハ　四きのちまる
一ゆ〻ハ　いう〻
一ふぐハ　こひ〻
一えびハ　えゝび
一せにハ　一すゞ
一ゑ文二文ハ　一ッ二ッ
一うゝそゝハ　おけられ
一ほんきハ　こゞゝ
一うゝぐるさハ　ついまつ

一さけのうをハ　あうまる
一いゝ〻ハ　おむ〻文をゞそれ
一ゆ〻ハ　ゆゝゞ
一ゆるあハ　ゆる〻
一こまめハ　こゝのだら
一せにハ　ちあ〻
一ゑ文二文ハ　一ッ二ッ
一うゝそゝハ　おけられ
一ほんきハ　こゞゝ
一うゝぐるさハ　ついまつ

女ハ髪のあてゝかゝんこをゝの目らべうあれゝつゞで業にも書られゞ女ハ風流乃
男ハ髪ゝあ紀かき也紀右きゝ細ゝ紀付てせひ色いゝまゝもあやゝ
あゝんハあゝあのむけかゝべゝ髪ゝゝちゝとゝハ髪のつやゝゝうゝくゝゞれ
かゝるゝゝゞちゝゝあれゝゝゝゝある物あれゞ女中の図をゝたゝあゝふハ
うゝくあゝれゝて祝ゝゞれ髪ゝ文にゝせあゝふゝゝゝゝ沢
一髪の油ハゝゝゝゝの油をいつけ悪いゝゝゝゝ

ぬく長一ひろのうすやうなるひろひろとしてうぐちまでうあがりてうすげ
うすくしてくのうのれ付ふとくてとがりたるがをもれるやうなるそり
たるのくひつてうのあしきくあつまるあるうねりうるしのもふ龍のうまいる
ちいさくびひろうしあるくらいとそけすべくたのかひづくるりのくたかすぢ
と中ぶとみくたのあしく一眉にたんをいるくの龍のうちに脇のあのぐくいづるぐ
ぐくうすくくらのふべくくまくくふとくたいやくくとい地義のうれあがしし
すぐあるふとびあくくくすぐやあがうるうくくあるくくの目りとか
をうして眉ふつくるあのあれがあるうるくくやうたいたがしたいをに眉にうくの
ねあるうぐびを眉ニケ月まもうすれまもうすく眉大ぐく眉くくたてまめ
これいをさあ紅人ふつくる眉くうくる眉これ年ふけくるくのつくる眉くいづまも
眉ふ花ようつくうちぐむるのくたくうつくくべくくび
一白粉くいふくとはのにうてハ秦の穆公をめてつくり色むすあれ義をく

めくくめのふりでつ拵うて持統天皇の頃時新旅と云人をくめて作りをく
天皇皇をめくうあふされがあるろのをのくをだまれる法うていろうう
ぐうためぐうふのくたれ義ふくうれひろを時ふうろををあのあくたうれ女を
うあれて八日もあるろのなくすぐるふをべくくびのうこうて八虞氏君楊貴妃日ふ新
うて衣通姫小野小町をんじめむくくく

一てうずの粉は白みぢまちくひようへ赤小豆の粉　緑豆の粉をはひのやし
たぐへこまやかなりあせをかきびるべき出べ

⑦ 衣類の洗ひあらひ干あやうのこと

女中の衣類をあらはうくく方ひうしぐ今にいたるまでは地あり地白のぬひ
たくへどんすあるいはちんどんぜ熱ぎのこと上代風ふく今の世に見きれぬやうきぐ
田舎ふうとて京のうこにてわらふくく紋の町風も時世にうつりかはりて時はけをあり
染もの年々人事の習に替るをうつ中比の者は小色染友禅をあれ九づくし上
京し八文字屋そのほか比の者は下京染の打出しぐの今くれぬやうにかわるくく
初ふく出ちろ八比茶比白ぐくのあるうを屋うやくをあり出られども見も又いつしふ
出るるべ時のをありあるうへ大ぐこうぶきをるより出るあれば見をこのくを見のあも
被ぶをしてかえくあくく衣類上代風今はあれ初ふあ見るを見のふ女中こをあも
絶ふやさくくなるものくはの見時分をありのあうあれくくを見のぶべくを干ちうく

ありのひてハきをあけあくくぶ比見をあるハいつとてもおきあるるものくをうくあ
やんあども見のふべ葉ハ比白のくぶきれいなるものくあせをうくぶりとを見
のふべ

一帯は白絹一さ　おびしの染帯ぎさしたおひすび見今をあり風へ
うまれつきの様ハとおたに見ぐうひて帯の白ひすび見今をあり風へ
中比をあり茶縮子花色縮子あど色いろをあにて帯のひろせだうつうあべ帯も
女中のめすのハ目ふくぐぶきあのうぐ成りとくするあり
出巻女けしのうの服ようの衣類染中ふれ隠六七年もむくれ海をきまに
出せハ今をありとあるも六七十年以前の今人事数ふる間ふ髪の結風衣類の
男帯は拵ふいく変ようう習しやらん先帯ふていをぐふうう毛織ぐちろ二重
どんぜ毛きくぐひらうどあど近くをあり今文政年中ハ小やあぐありぐろふれん
庵ドのすあど行られど出後十年も経んふ又いるあらん衣類染ふ又用ぐうう形

ふびんなることなり。されば人間の生涯は、たとへば、ながれの水のごとくにして、とどまることなし。されば、

女重寶記　二之巻　ちふぐんの世

目録

一 ちふけんのちぶれ
二 よめどういひ入る日ごろ作り
三 ちふぐん酒色この次第
四 ちふぐん産のちぶれ星のちゑうき
五 ちふぐんの夜せん紙くい物のちぶれ
　 客語七人この男　川渡しの男
六 江戸子男相ざうゆうれい男
七 手の色ちうぶうゆうれい
八 砂加ちゆうれい男　親子提子踊子の男
九 つゆの雪ふり〳〵酒のこゆうのゆ
十 女中よろづくいゆうのゆ
　 世ちゆうれいこいゆう　さいわれめくこゆう
　 ゆれのこゆう　ちづけのくいゆう
　 うものくいゆう　むうたんのくいゆう
　 ざふにのくいゆう　こいいひくいゆう
　 りちくいゆう　まうちうくいゆう
　 ちまれくいゆう　めんるくいゆう
　 うりくいゆう　ちやのこゆう
十一 貝合の記え
十二 天兒の事　傳遠子と云

女重寶記　二之巻　ちふぐんの世

一 ちふぐんの次第

女の夫の家に四くしやちらけてとびちふぐんといひよめりといふ男りゝ子く
いへ婚姻とも嫁もるを帰たいふちふぐんの時初婚をなとをもるゆ色女
色んか成といふ字を書て婚といひ男むりひふいでく女か男か国て外ゆ色
女色んか国といふ字を書て婚といふ女か夫の家を永く絶るまでわゝの家と
もるゆ色に女色んか家といふ字をとて婚もるといふ又女か父母の家を家と
せゞ夫の家を日ゞ世こかとするゆ色ふ夫の家に帰といふ義ゆて帰をいふ
されば死るのゆふてびつくぬあふひあれどよりいりてふてひ父母の家
ふつくぬといふえんをとりてこしのりものをおとんより出門火をる紀法と
戻とおくらちぶゆ死人を出ゆ色びをもるゆうく方ゆもあるゆ
ちふぐんのめでふ紀貴達か死人のまひをもるゆ呪といふとくゆるとく

いむ日をあれだよりいりの女中いきうとあるうくをはくしまとうや
まひねぐのをあれそうつらぬやうたたしあこのふべし

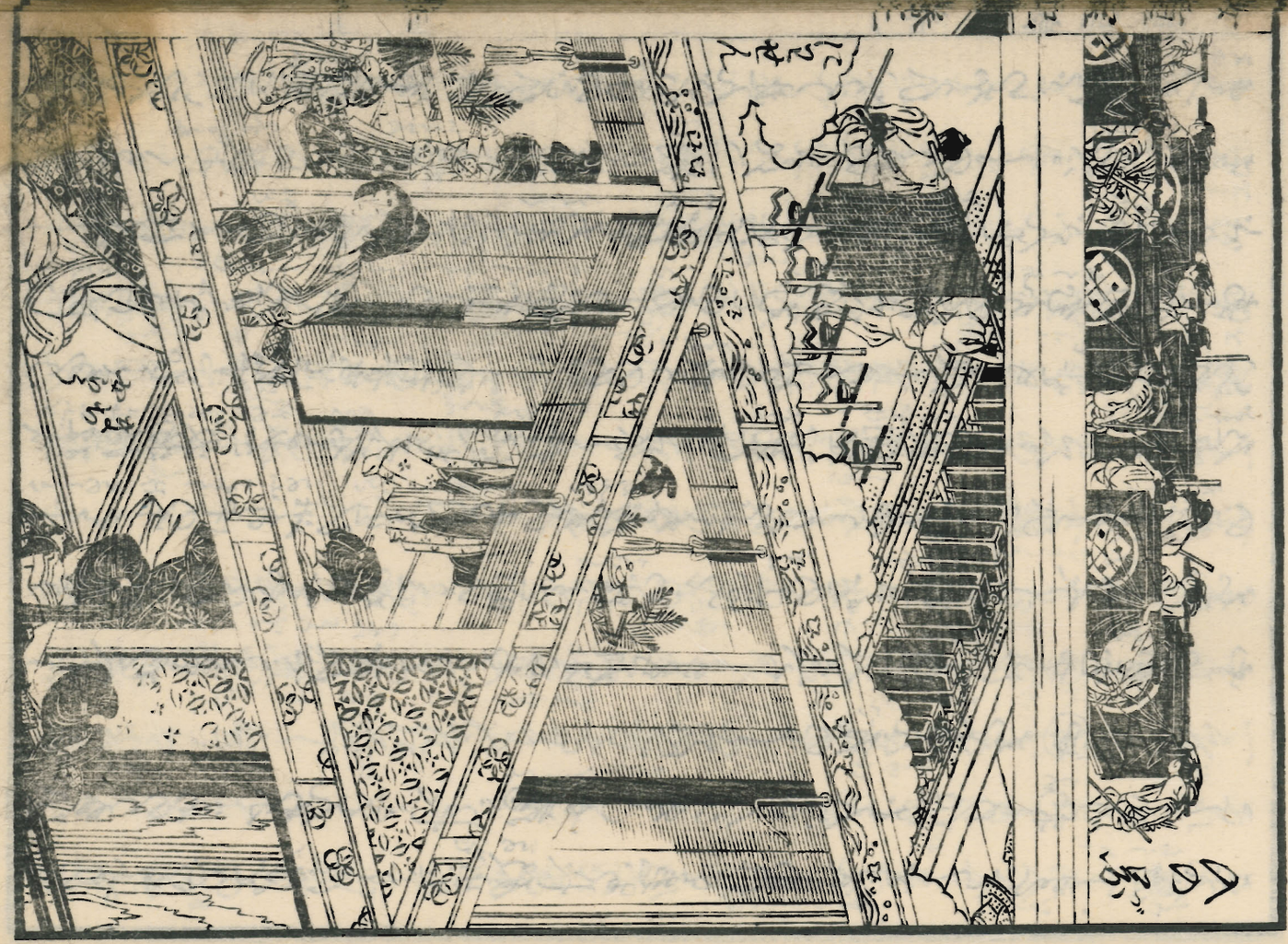
㊁ よわごろいひれあしびに日ごろのゆ

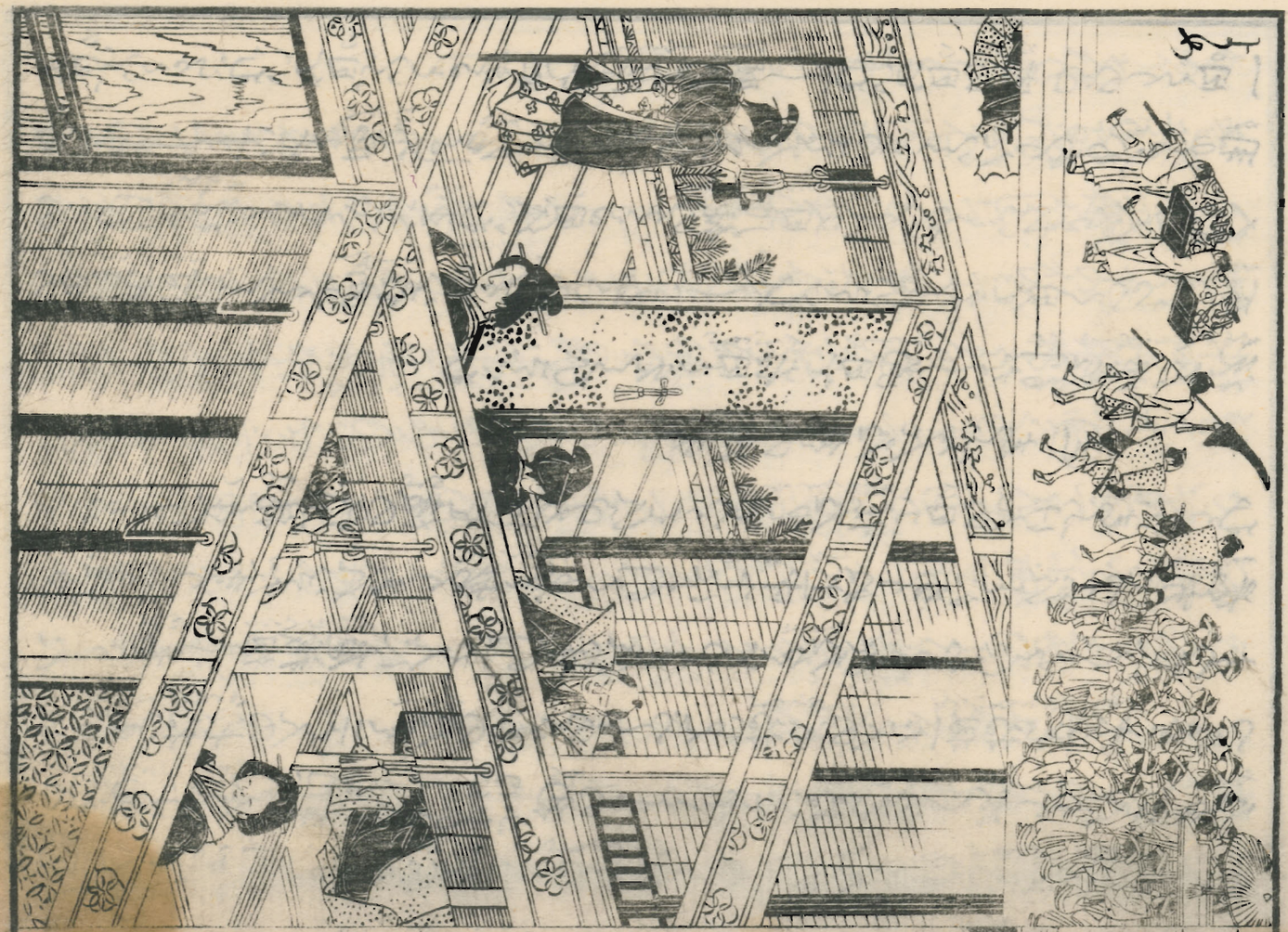
えんぐこあをびしこ男の方ようゆ女の方ゆいひ入つらんゆ俗ゆ色をたのこ成
つうたといふゆ袖ニツ内一ツハうらいありてあるくゆハおりてこれるゆふらいゆに色て
ものづ迷もしんづしはて扶ゆ二枚ゆてつゆみ中をあ門ゆをもむをび切べしうら
おりてたゆ出つくのしうつををく匿ゆ帯ハ入うゆ去ゆあひいこがこあゆあり帯ハ
斗帯武斗帯さうゆいたんぶをもうゆ朝入うの時ハ法者法者ゆををくゆのこた
中よりゆたのこよゆ第又ハ合結に帯さうゆをあるもありてれよりゆざゆれを
を帯ゆ結ゆがしちりをむをんでもあうゆとて嫁能さゆに云ありて治門ゆ結
きを迷をゆ結ををんがしこうのくこびゆ物いこづくくをこをまあををくてはをゆた
ものうをれくのをどふまりをせてちがひゆるもあらし

一日ごろのゆ寅の日をいむべし暦の上原のをやぶるといふ日をいむこるといふ日を
用ゆるゆもありたくこうさごんこうひくくあご皆ゆ原ゆをゆ十しくこう日
ゆむ日ゆ日ちくこめつゆん又日月結のこうる日ゆいむ迷をゆべをこうる結ゆいむこゆ
ゆ日くゆちつくゆ日をゆこうびさごむべしこゆあこうこの出る日ゆ去ゆふこうこ付ゆ北ゆ日ゆ
祝ゆ云ゆ世ゆ結ゆなし南日を若日をゆこうびさごむ

㊂ ちふごんゆをの次ゆ

むしゆ去ゆふげんゆ日ゆ法ゆををゆこうをゆ日ゆありゆを後ゆ代ゆ法ゆをゆまくゆゆて
前方ゆこうをゆをゆにゆりぬ上中ゆにゆりゆ去ゆ帯ゆ法ゆ
ゆて一くこゆにゆるさびゆをゆこうをゆ法ゆまゆ一ゆんゆ庭様ゆ一ゆをさゆた
つゆのぎ次ゆふ長ゆ扱一ゆんゆの長ゆハゆんゆつしゆのこうゆの方ゆ二ゆんゆの長ゆハ黒ゆ帯ゆの
方ゆをゆそれよりゆ次ゆくゆの長ゆハゆこゆ中ゆくゆよりゆの扨ゆ門ゆにまくゆ三ゆ門ゆ一ゆ文ゆ今ゆハ小袖ゆつ
ゆうをゆ次ゆの長ゆハゆの方ゆいゆくゆ白長ゆ帯ゆよゆハ長ゆ帯ゆの方ゆ門ゆかけゆ人ゆ二ゆと
まをゆふゆ物ゆの方





そつぎ法ぐらわうひいうう法んぐいまのごひうけ常第貝をけいうれ四ニつぐ
ちさみ第八こ〜のりのの〜さ九く一對りく〜んべ〜近来いうぐら数おく〜うち称
ぐんを常ぐんをおふ用ぐんをを生法べ九をふさいうあう初ようく法くべ〜
あとに都ちむ分の人おさへ行むこの方ちも都ちむ分の人出て九ちをうけ西し
いづれも上下をきる傾〜のぐれく〜夜うのわぐ〜の衣裳を元ず、いむ〜あう
九ちをうくすよ自捕を一番にうく〜んと依法へもさへ来る老へ吸物酒祝義
の目録ちく〜びにふゆ毒〜のちぐ〜ちる祝義の引出し出す中の下ちを下
ちあぐ〜ろべ〜出持一さんをの上ふつぐらはよこ町のうこかきをやうひさいりゆう
やらの都むゆ〜に下指一人ちく〜ちまぎれふこちく〜とを人ぐうくものべ〜

四　ちふぐん座のし〜ぐん

こ〜のり拍子のに一ぞん〜ぞんいつぢ〜女踊ら〜べ〜ぞんめふよあのりのひ
ぞん廊下まぐら〜をうきあげをを老ちあ〜べ殿出て〜こ〜にををうけちふのく

さて殿ちく〜に入ちふ〜をまち女房九むうひふ〜でちん〜ちゆ〜ちのあいんちべし
それよりう座〜きに出るちあり
一座のちぐ〜ちいよあの立居とそうそのの方ちをれ座に居べ〜舞ちを家居
とそ家人の居る上座に居るべ〜まち女房ハ舞の立の座ハ居るこうぐ〜ハ
よあの座よりか〜さ〜出よあのちの座にわ〜くさうぐきそ子の立さぞ九を
すべ〜小女踊一人よあれりしろにつきそふべ〜
一ちふぐんさうづきのこ〜武ニごんのこ武ぞうよあくむことにすべ〜そと義
挑ふ提子をのちいで立変にうぐうたる瓶子女蝶のうこの酒をてうしふ入
男蝶の瓶子の酒をひさげに入べ〜瓶子の男蝶ハうつぶけてちく女蝶ちを
むけ〜ちく〜べ〜さそにをさ〜武ニごんちく〜ちをてこごんのむちうこをさうづ九を
男のむこをまちうとへてこ夜づく〜二夜めのさうづきハむこのこそ〜ぞめてうあ
さんこ九もうとへてこ夜づ〜ちうこ夜めさうづきハよあのこそ〜ぞめてむこ

のこをもむるくられも二度つくいたくてうしひさげハ米飯さ
ひろめべしに次ふ雑煮いづるざのにハまちからうつぶのもすゆるく式時
如らうたがひにさうづきこをうにくに雑煮の時ハ餅を雇ふあらべうに
一膳の祝儀も大うこ大の盃ろにたあ〻まづ一だんにまゞげ二だんふこだうに
さうづきこ二つくうねてのち出まゞげとすこ〻もだうこておくべ〻こだんな
らひらに出るようあむこふ出来をれ〻あもをるくこ者ゆくこ者人出てくるこ
のハ餅をまゝ入てあるあゞえするのハあゞ〻えをのちあゞ〻さかづきのこ
だうをこうのげくむこのくこへむきくもちまろうてこのまゝよあれまくふさうゞ
きをいあくあうこいゞさくゞきをこ出酒をうけてよあにこくこんくこようあらうてのこ
をこくこのてのむこをまくあゞえハ下立ひとびゞうれくくもゆくこんかに乾
こへてをまくこひゞ左こうこ又こ度あをこのこふこてをさうづきををこのくこ
のちゆこむこくこへ又あゞえさこのゞくくこうこくくこ餅こどのくさうづきを

おくを砂あるゝえを下に重ねまきさうぶきをとり下れ二つのさうぶきをとこ
をこしこゝのけむこのくらる重をとりにおきのくしきを重二つをそとにてこ
おきこゝりこのよ花の重の養をかをとをべし一時又二つのこだうをもくむひの
右のうきこをとをあくべしもんすあ屋さびそまくゝ又敬こちて重をのちむこの
まくにおくこ式時むこさんのごくゝうこゝとてこゝのむこをとの方へのち
ゆくこさんのごくゝむこゝとてこゝのむこ又を重を一の下にをこ新花重ふあくく
敬ひこのごくゝ重上花ふあ代しさてそまくこ方をたの方へくこさへ敬こちて
重をとあのまくふあくくあ敬くこ方のこそ重をうくむこのまくふあく加へくこ
方のこて下にあくこ敬あのをにてて重をのげそまくく内泥へ拾へべくこ方を
皆を入ゆくむこへ花ををべくこ泥右に新巻へ出てこ方に重二つのをけんぐくと
まちあ方へくこ重二つのゆくべくこごんづくのむべくこそまたむこ入をべくこ右を
巻れ横をあくくまくこ敬へくこ先より下れ横云へくこくこのこだうふ

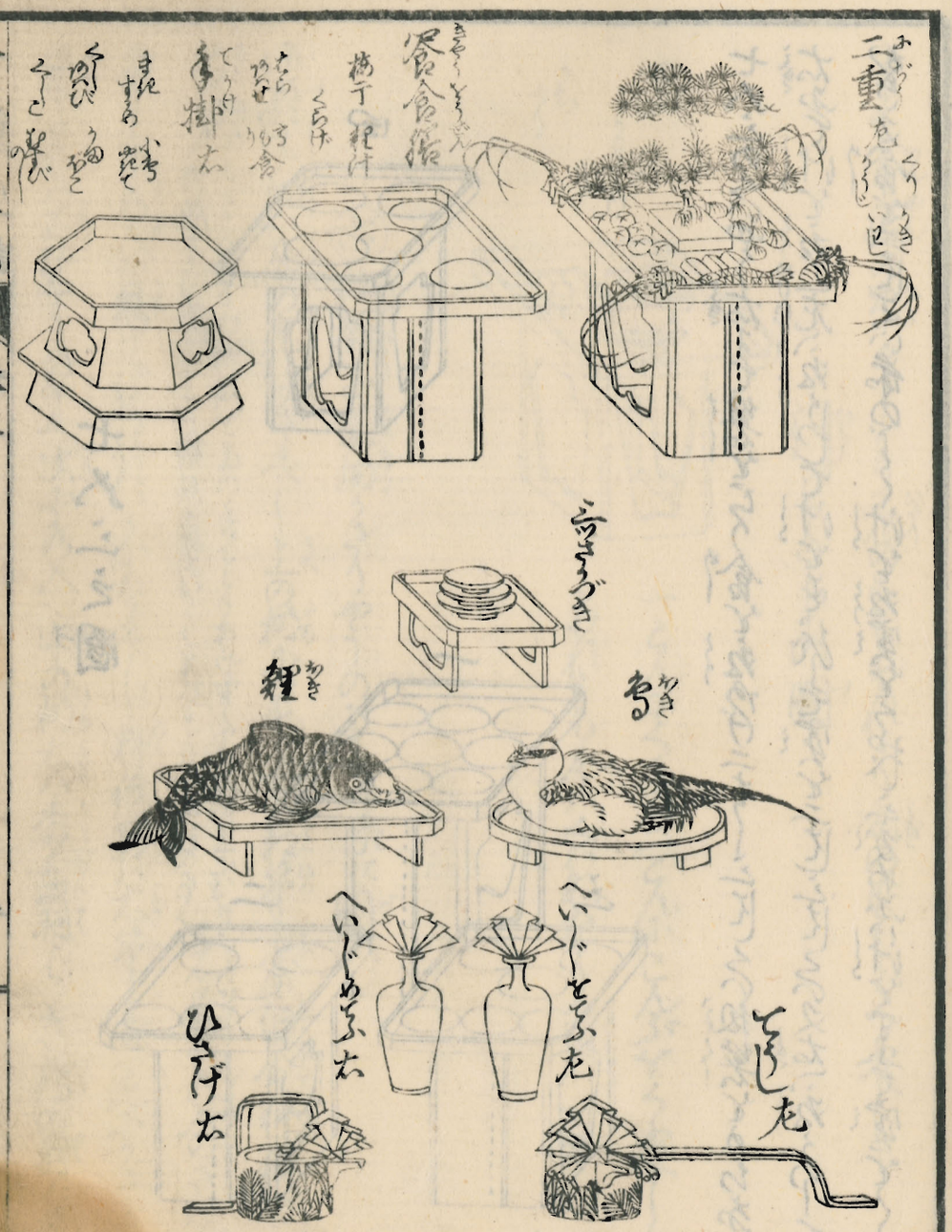
小ぐくこ枝のを一枝よりこんぶこつくこ方のたのむくふに一枝へちもぐくりあつこだうれ
方のむくふに一枝へのくこつ方のまん中にいづれも物あくくをべくこ方をまこに
うくけこ枝くくじ橋にのをてあくくべくこ方をくこ方をたの方へくこさへ敬こちて
女婿男婿をつけれと橋とを付水にうてあひ分くく敬かのをくこ泥のをう
重の代才まへのじ先より下りてへ式仏法もいくこめくく重にうまをれむくり
ざうみめてくこふこざるでををまをすもをゆくべ
一をあをくくとて式こごんの紙しきをすをそむこの方をうくこ方をたの方へくこ小袖紙
きうあくこむこもよあれ方くうのふ小袖をきうへ産婆に出てをくこ物の及物手
をくりこ又重のゆくべくむこの方へよあくうふ小袖二つ巻たをくう紙庵上下紙
つくこ人物こむこをこ横これををべくこ
一よあれくこうをくこをくこをとあこだうとあをこ方まも女房敬人下りて
面くまくこ紙こ物こゆけゆくべくむこもむこいりの時かくこ乃ぶとくこ

よろの父をやうしこ引出物そ掛つきの物ねぎつのそひとあり
下ぐ八代事を

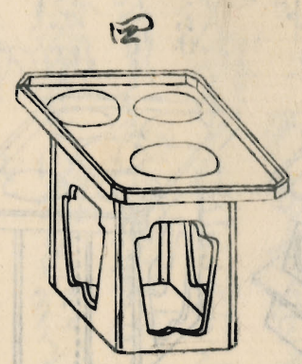
㊁ちふぞんの夜せん紀くいのもぶるくびふ後景

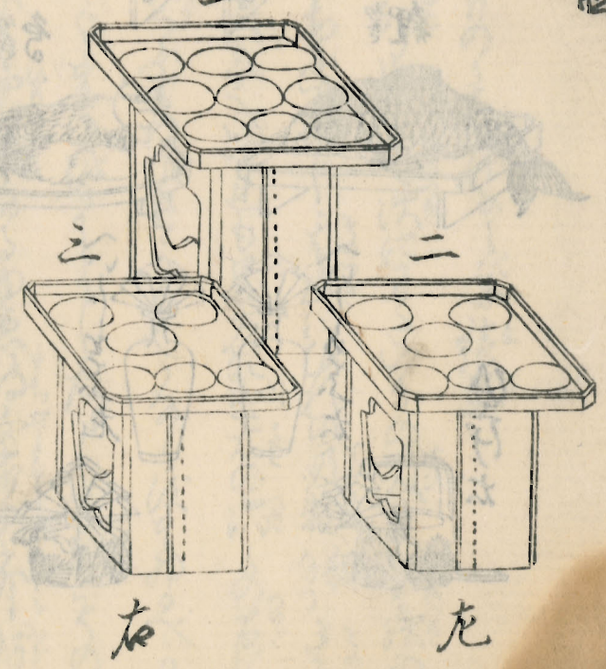
一ぜんふまうけ二ぜんふこ方こぜんふ引ふらひ上そ次にちこいりの吸ものそ次ふ
うちこそ次に雑煮ざふにの後へ切りのちふすべ〜そ次こひれの吸物雑そ
次にうどいりの吸ものそ次ふ食膳そ
酒こんづ舞もよあものむこくい物ふ
らひ酒とくも敷へ食ぬてうどざこつぐまひびくしよう〜たづ〜くひこそのの
わく〜出てもんくる半ふくふ父いふふ
よ〜ん出そうひてさ〜ふ引そること有り

食膳乃図

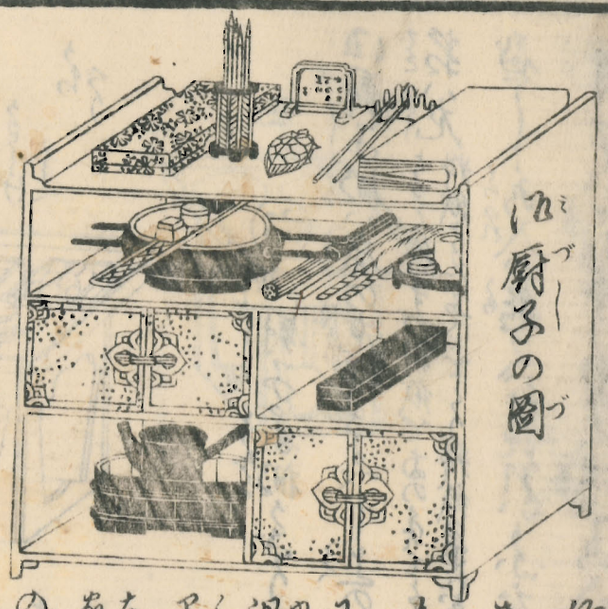


七人ごとの図





七人ごとのくいのゆう方おうて菜をとり食をえらびこれにしたがひ拵をのちあがらかをてけをとりて左へおろしてけをとりて菜を二度こしたるのち右へおうかてけをとりて菜をとりて左へおろしてけをとりて菜をとりて



厨子の図

竹の皮ふつゝみあらゝかあく六ゝ四かあり若さ一寸ばかりをつゝうぶ長ハ六ゝ寸ばかり

だゝひらこうぶ天目二つをつゝうぶ長ハ六ゝ寸ばかり

ハ六ゝひ家ゞ〳〵をまつかゝ中にえかゞ乃湯桶ハまの筆の若ゝ

墨柄の上の柄ハ短冊若中ハもゞ上ハふゝ若

文なをこゝ者〳〵中の柄ハ古今集万葉集下

の柄ハ右ふつのゞひらこ中にいゝ若花ハ

十二組入けゝ中乃ゞ

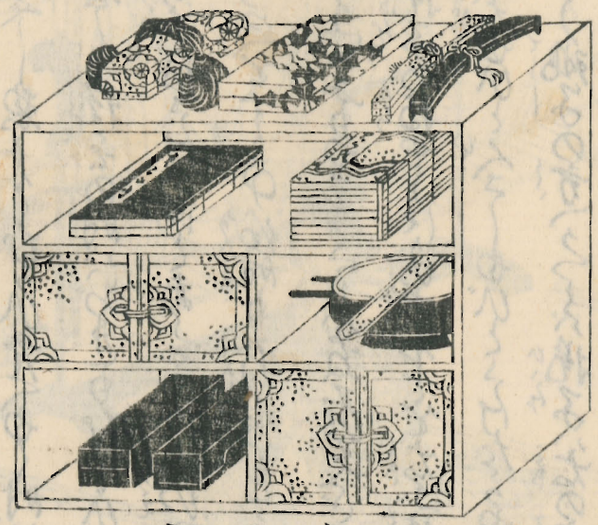
七　手の道具かゞゝ中ハ

一本ハ道んぶゝ掛　本の太ハ元ハ長柄ハ

ゞ〳〵ゝ手のゞひうけハ墨柄の左の方ハ

ゞ〳〵ゝ

墨棚の図



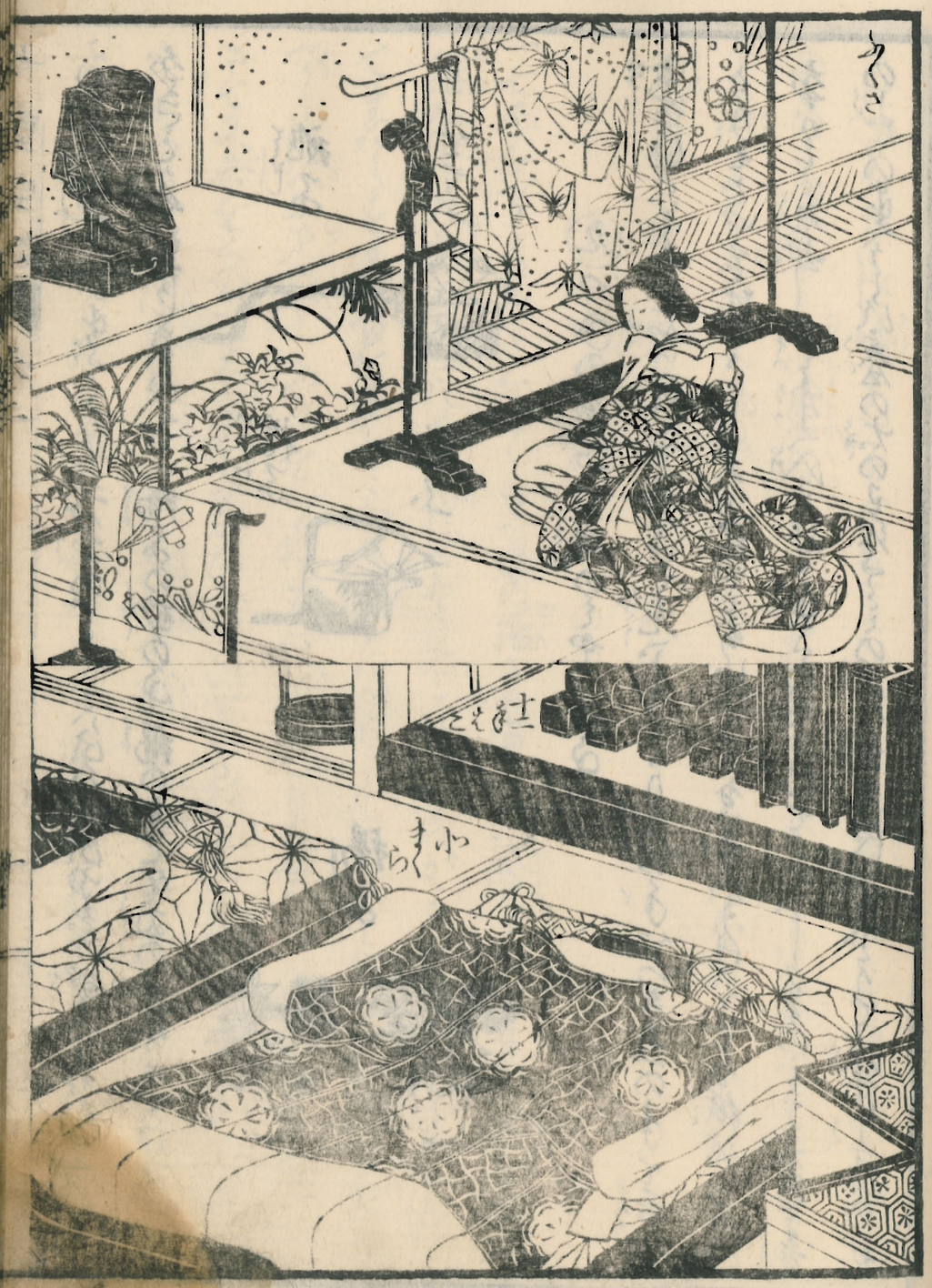
八　硯ゝ文ゆうれ乃

ゝ乃ゞ〳〵の硯ハ二あゝ中の中ゝ文ゝ乃

ゝ〳〵ハ七ゝ中ゝ文ゝ道ゞ〳〵長柄を十二本ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

左の手ゝ文ゝ右の手ゝ小ゝ柄の湯の口ゝ文ゝ乃ゝ右ふ文ゝ〳〵横ふ長柄を拾ゝ

ゝ乃ゝ〳〵ハ中ゝ文ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵



さゝ〻くつぐ〻しゑごんの砂ハいづまもゝ方づくゝゆるあうつるのしゆくにむす
ぶゝいとくゝ太さたいむしとくたゝくゝ右の方へ重さゞる時ハ砂の左の方へ曲くゝし
又ものさうづきむすぶさゝうゝゝくゝ時ハ右の方へひくゝし此時そまゝ左の方に命ひ
よゝ花をうしろふるせゝ色をむすぶとゝいふく末花までよゝ花をうしろにせぬゆゝた
ゝ曲くゝくゝひゝ産くゝ曲くゝ時ハ右ゝのふよゝ花の方へむゝて末花まぐくも花
産くゝ花の時ハいづまもむゝひ砂ものくゝくゝはおくゝよゝどうの砂くゝくゝハ絶子
のくゝひさげのゝとゝあふゆゝたんゝ結べくゝ
一ゝくゝをするゝ伸も産居をゝくゝ門あそくゝ産くゝさゝうゝ産ゝくゝさゝ北子
ゝゝいゝまつゝゝくゝふ産居をへぶゝてゝもゝくゝほゝうゝ花ゝゝ時ハひさげを門へゝくゝ産
一提子の結ゝゝゝほゝの中ゝゝどゝを右ゝ結ゝゝ左のまゝを右のまゝの中ゝくゝひゝてゝのゝあゝ
又ものひゝとくゝさくゝゝゝひくゝくゝ提子のふちゝをゝくゝゝゝ提子をゝくゝ
ゝゝ絶子の方へくゝくゝぶ提子ゝ右の方へくゝくゝ時ハ提子ゝ左へくゝくゝ

あしくたかいもしぼりもつへしはたのごとくにはかりあれはこれをあきこうのひざしきうへ　揚ふの砂のうへ揚のそこをあのまにうてはぐべし

㊾ つるのの重みゝ酒のこゆうのうへ

左のひざをたかたのひざをそろへて左のまをつきたのまを重をとうをそろいてさしうゑたのこの長さうなるまをはくてるる紙球をうあがしをもしをもしを時ふはてらべしをのこるる重を意のようこの出べしに意のたのしたこの底をたかうて意のようこのせ

さたへからもしに酒をたのふふもたてるる女房元ふもきてはまりひゆう
ふとのるゆふべし女中客のたゆしたたのるゆひてもしは者をたきみのふ
よハ何すそもまのようこれぬのをもこしたうたきみをんせそしをもふ乃
方へかをしおくべしヒが方へかをしおくまうこ

㊿ 女中ようのゆうのう

一七八こゆるもゆくこゆるもつのひの搖うてもまゆ食ようこのゆ長いそひの
搖ゆうこよ食を大きにのるゆくさゆうのとたいうのそくかひのゆうこうこうけ
てまゆくもうこ食をこゆこしこゆるのこをうゆ長汁をもふ
べくこに沿ふ花のすこのさいをうゆ長さいハ搖ゆもゆうこんゆうこうこ
さそこ食をうこいこのゆるのこをうひこのさいをうゆ長さいハ搖ゆくも一色こ二色
こいのふこくこにこをきゆふゆるゆ搖を搖てうふこゆるゆくこに沿こを
二いうつけうこふゆくこに沿こをもこ搖ゆこをもこ一色をこをこまでハ搖球

うどん食もさかもの門あるをこつじてのちまつふべし此の中にあるよこ又
くつべうどんかと云るうどんぬやうにたつべし其のかはりひの女むすこまつそまつ也
蒸しうどんむりのふたをとりてうふべうどんをとりこみ汁をうけてうふ蒸
うどんのうちをうけてうどんの湯のまこふ汁をうけの長こうれもかはりのようさ
是汁をうけまつすくこうどんとうけの汁をうけのうどんを其の中に並たのまし汁を
うけべし男のやうにたちねあぐうどんの長の手をかくるやうにうどん
一湯をのむこと然を下に並たのまに椀を持のむべし湯のうどんよ
うどんのうどんうどん一湯つけうふうどんをうふ時はたちをやにもきたて
食をうけら長也をうどんをうふ汁をうどんうどん
又うけをもべうどん一飯飯うふうふ汁のきざみ物を猪のさけのうどん
まづちをうどうを汁をうけきざみ物を入ひとつにうどあわせてうどん
さのこ物のこすべうどん一雑煮うふ中に五のげずそまつうどべし汁椀

ぬひのつぎたるを下に敷て上すべし一袋ふくろの口をぶかくひらく出べし無かりてもなりそいくさもぬりのこまをつまみてもつべし

一袋はやはりじあるをとつべし又まあてつまみてもつべし

一まんぢゅうのたをすてをうたをたべくさ出べしてつまみはなをふべし汁のそばにて出るまんぢゅうをとつべし

一粉ふくの茶あるをもさにても茶をたをたの方にあり一茶ををはく

茶のりしたをとおなりてたをたのちたをしまたわをとたてをうたをしまるを

めをとをおろくおこををうへ入ぶ切りて出るこもの一素麺ふくの汁ををあげ

らこをこをさふあんを挽ようををひへ入さて汁ををあげをつべ

汁ををたのちをこひへくをもををうへ汁ををうへくちをわいくたびを

汁をを下に重をひれをうのげをつべうどん白をうあるををををうを

あを男れをに汁ををけをつべ汁ををつべ索麺のををうををかをををを

あををうををを汁をへべをを汁ををををを

蜃貝の子る蜃貝姫、蛤貝姫ハ素戔嗚尊と
ほくり蛤貝姫ハ素戔嗚尊ハ天孫しめ蜃貝姫ハ彼尊と
成て素戔嗚の子ハ清浄ハ汚て清浄ハ汚て清女須勢理姫と妻と志のハ蜃貝
姫の腹のハ彼尊とハ今の天皇のことゝ雄略事記ハ右の記日本紀
ハも一説と書て一説と書て割り裂て菊ハ忌する服をこゝとゝ
ハも彼尊ハ中暑の頃ハ婚姻ハ時貝桶とゝ天皇を先
立るも蜃貝姫蛤貝姫と書きて妹となん兄弟とゝ
ハ貝合ハ蜃貝姫蛤貝姫大巳貴の命ハ新を救ひまゝらせ須勢
理姫と婚姻とゝ蜃貝姫蛤貝ハ名をうせて貝
合とはてるの記りと人ハ世となりていハ京ハ天皇又十三年十月ハ
東国ハ幸ゝて上総ハ陸国麻須ハ渡りゝ大空
ハ見ハ笑ゝ見ハ見ハ見ハ

七十二合側て男貝の内ふハ合落と並女貝の内ふハ渡落と並君ゐ
代いくゑ代ふやくゑ世代孫とのゐ
流の袋ふハ桶にをさめ男貝桶の内ふハ番貝の浦ゑ家久とうごゐ
板と菖蒲を苅絵ふ〻ふさけ内うゑにを洲崎ふみさごゐ乃
雄雌を櫛合ふゑ京紀章みさごゐとん蛤をゑのふゐぞゑて
夫婦ゐゑと貴ゐる言女貝桶ふハ廉潟の浦ゑ家久とうごゐ
杉と名居一基を櫛合ふ〻蓋の内うゑふを水茎ふ蛤をゆさゑに
す貝合ハ大巳貴と須勢理姫夫婦結の神ゑ契をひゑち琴ふ
ひゑび蛤貝姫ゑおゐゑの流のいゑくゑの貝合どゐ〻ゑ
得りちゑ恵き神ゑうちと過ぞゐる婦人ゑ宝櫛と（伊勢の国二見の浦ゑ蛤とゐゑを云ハ流の世のことゐゑべ）

（十二）天兒の事（付遠ゐと）

りと見ハ初ゑゑ女ゐ切ふて櫛をぬひ脊負て樫ひありく形のごとき

ものふりをゑ流ハ浸ゐ人形のゑくゑせり女ゐ郷付ふ見と出ごてりと
ゐるハをゐ月ゑ美雅ハ悪く遠ゐ行けてを身に流ゐ〻とて紹
を知も遠ゐふ夜数ときせ笑食ゐ用ゐゐる人四付ゑ菓りめを
外菓子ゑまでもてゐ人宝んし〻かゐ〻ゑ紀章と婦女嬢ゐて
成人の後まで大切ふあゐ先章と言ゐ貴ゑりゐ〻と我くふの
ゐゐ〻ふ〻ゑ姫きりのふ世ゐゐ外れ〻一名天兒古名技倭宣（天孫と
神代ゐゐ〻ゐ〻ゐを言ゐゐゐ〻ゐ
大国と並て下ゐ国にまゐ〻ゐりゐふを

女重宝記　二之巻

增補女訓用文章　洗耳橋正敬著

全一冊

世ふ女用文章あまたこ有といへども文四ツ書くして長ければふ合むずしかるを今ものこ用ゆる所の文云葉ちゝしぶこの書法を自立ふてこゝろ〳〵武ハ時ふ用ゆる細ぢん月ゝ吳右ものゝ分にて児子ふこやく合点せゆくやうふ押〳〵師匠ふくしてひらゝ文をうきたゞゆる書なり

秘傳重寶記

両面摺折本

世書ハ梅大毒虫を刑平生ふ近べきものを書ものを紀しうハ衣服の志ゝりの油ぬきせ法或ハ途中茅渟の魚鱗を取ふ法ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ紀せり実ふ人〳〵老に情中して日用重寶有益の始書なり

女重寶記　二之巻

目録

一 懷妊の内ふ食ものの事
二 懷妊ふ懷妊ふあらぬを知る事
三 懷妊の時定めたる物ふ食物ハ色〳〵ふ内食物ふ食ものの事
四 懷妊の時第七月目ゝ胎内ふ子
古方医家第の説
五 産の時むつかしき方の事
六 産の時いむべき衣装并にいむべき
七 和死胎ふ子の事
八 うまれ子の次第
九 あぶぎぬの事 うぶぎの事 帯をつくる事 産まれ子の事 ふいぞめの事 繋おきの事 たうの事 うぶぎぞめの事
十 うまれ子産せの事 あまりの人参 湯のとの事
十一 女中方抱ふ合
十二 子を求る秘密の事

八 産あがこらしめおくべきものの事
九 産にのぞんでそなふるもの
十 産後出血の事 付 食物うつり色
産後はじめぬ食物はじめ
十一 女のこしをおもうて産のようす色のこと
十二 門ふようてうまれぬれば産のこと
十三 難産の妙薬 付 うつり灸法
海苔の事 子安貝の事
子をうむ時の用意衣服の事
一 あとばらくるむ時のこと
十四 産後乳のでるむ薬 乳のこと

女重宝記 巻三

一 懐妊のもようを見分る法

それ女は十四さいよりもちぐわつ月水あり男は十六歳より始て精液通ずる也

男は二十あまりさんれば妻をめとるべし

女は二十あまりさんれば夫に嫁せべき精を固くしてみだりにやぶるべからず

もしおそれてくるしが胡ようてはいけ法あり男は十六七さいよりそめとり女は十三四ふて

も嫁をもるあるべしとあるうへ方わどもあり婚姻をとるにおこたりのべきことにあらぬられ家紀の家に我子の不義出来んことをおそれ男の労実の病残

ばかりなりおそれ嫁姻をいそぐべきさるによりて男は妻あり子をもうけて

子にをしゆるすべきをもつて女はいまだ初して子の親となり子を育る法をつき

まつ夫婦精をうしなぬ内にうみ子ゆえ病弱なり短命多し短命なる人は

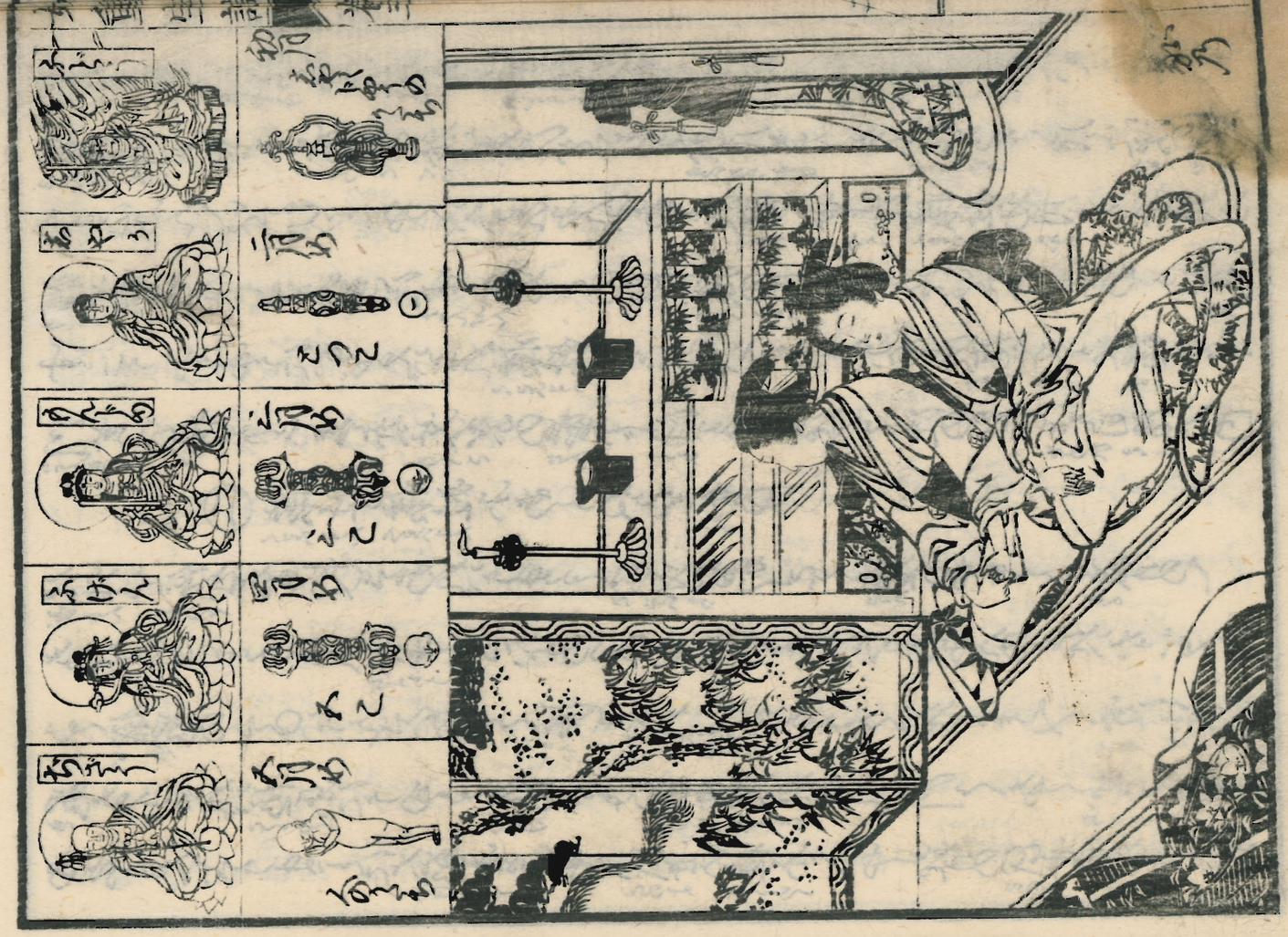
嗣ぎうえを先祖のあとをうべ不孝の第一之罪人也後なれど不孝

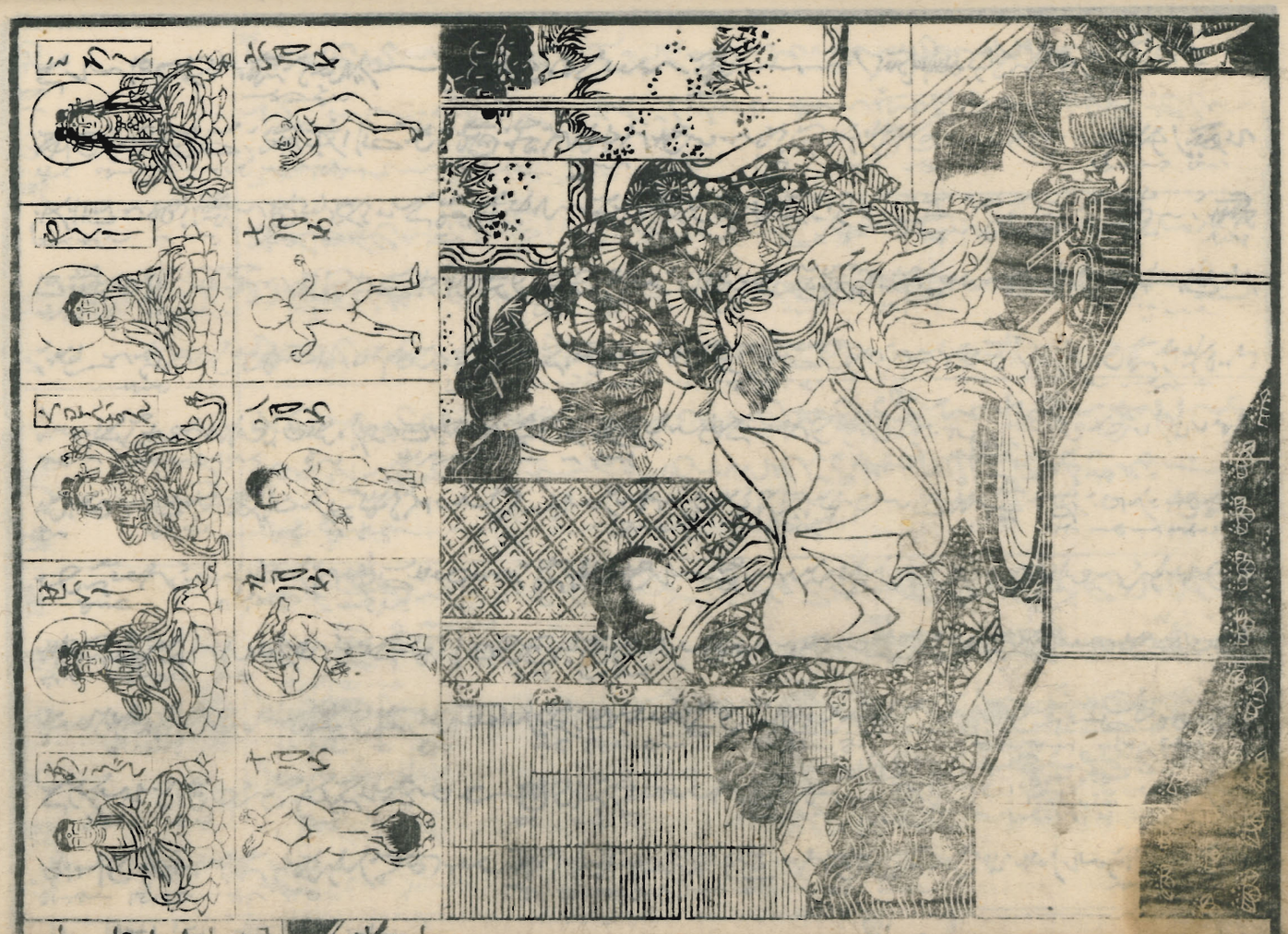
とすとのうへより男の婦をりこむるいふとまけ先祖のあとをとやさん家乃
因ををさわんくわこ伝のの絶くもあく云にまりひもておれて書をりけと
選ふあしばうれさく婦をさるに七つの法あり子うまぬ婦を一つあるまたも長し
去れども子をうむうまぬいを身の虚実ふるるのあれば性ひろの死のなう薬
徴虚ろれば子をうまこと有くく又実ろれども血塊横聚茅下等の中ひ有くく子
をうまぬも有去れば女とうゐれていこせひとうハ伯ぬ小極くろ死時う年くけ
てうてうびいの婦とあるのあればつのひに身の表はをんげけ病あくくろ品ん
するのうに去のふび懐妊ーてい子後くく初子の表は食物以下まをんげけのハ
産ーくうにんの胎ん表はやて別ふ去るぬかく表生すれば病あ死ようと
あり病ろ女ハ女ぶし生質ようの死ハつくくなりていはまくろ品んすくく世あを
みるにいの死のいふふいちやくくと大名歴くく孫ひのるいるいふできこあるに裏くちく子
のあるべきを因きくれとわくくらまとれ先はんとはうくとても懐妊あ死有孫なの死

四名とりんとうまこと大家ふるあるいに代世の極小くい中死のの代世の死ふく懐
産ありされば極乗にうのくく伝のくくふ未世濁乳るればうりくあくれくくる
るく儀産のくふいうんぶのどくく表まれれ伝ふるりうぎ死くくくく方にあるの
あ死ようてさくうのひ女中ごくいのつひいいにおとびんくるれんのと死ハなるく
仏神を伝ふ表のひびさあればうまくくふ表れかくく産ものくく

(二) 懐妊う懐妊ふあくくぬをあり

門芳て粉みて表ふ表表の愛ド汁ようを死ようたのむびまを日後乃四
すにうふくくのにもがえばられ懐妊くうごうすばくくとうんふあば病くくよう死婦うくく
極文をせんじさうがきにまうやどのむび後の四表きうにいくくむくくあうば色
くうふふんくいるむくくあくばくくるふんふあくば病くく世上に懐妊初月とう十月乃
胃後四ふやどるるの子神をあくくるもくくふ毎月ようるふ孔ようくくに決の
ようくくのくばを伝くくけるのふ不動ひ生ようう孫月阿ふ陀如来にもとぶ





世上の女中まことに学問して其の理をわきまへる人をもまれなれ今さら何もいふに及ばざれども一通の理合をとりて後の世に伝見やうこゝに拙なき人くなる公家堂上のもてなしの理又我が日本神の代の書の人あれば天竺の仏十月の胎内に書に伝えたるべき、されば一日の内に何方へ参りもあるべきもあれども人を神仏にもあるべしの人のていくに方へ参りもあるべしこれも神仏あるべしこれのうちに人をのぐ

あるべしとの日本数万人の神仏をうむべきなり人生人の神仏をのぐ日光様の神仏自人の釈迦

なるべしとの神仏をもあるべき日本国神の代の書のあるべきなり

分かりとおもひて見るべし次に医学十月の胎内十月の胎内の仏の作者

日蝕も阿弥陀とおもひ十月世六教の月の出よ八幡の弥陀を拝するとおもふ人は母胎へ

文盲と思ひ拙き我さえ神仏をうらの神仏をのけざれば正覚の神仏をのぐべし拙き懐

妊の女中初月八弱杖二月は猶拙を至てあるとおもひ不動尊うらもやう紫へ後さ

れるとおもひて伝へるべし〜年来これをよく深しとく医書ふつふ所八

初月の胎

一てんのちうめとなれたるとあるとくちうとうの中ゆ

月ごとにうせきびとなれづつもちてまうざるにあうこの子供あつく

いまだちにいつしびし

二月めの胎

わんのうちにあるとちうにいつくれもいまだまことろ

こゝろふかしびたうるのたまれたちでめくなるあろぶぐじ

かたちのうしくかたのしぐるなり

三月めの胎

その人のうちられるちのごとくうこのまゆふ仏ぐうぶんくまとうふ

あるくくなるとをしゆびをわどころいまだ二月めふまじ

くですこしくかたくなるまでなり

四月めの胎

ふかしとうれたちでめてくちもとるにたちにくにてまことのこころふ

あり鼻下丹田とを居どころとするあり消月より別くく食物

とをなり月ごとにぬあぢにをけ指月ようれをあすべし

五月めの胎

とこをとんかこふかうとさだまる男をゆびせハをゆすれのをこの

こをんかをとやどせハあまれのをこのむ夜あけどこゆのをそのやふ

あり月ごとをこハ神ぐうなハたふ神び

六月

毛髮をむしりとり舌の根くびりてそをたをうごうくそをたをそうぶう　をんなの腦ぐりあの中をあらくぐしひとふのちゝれ中ふぐんくうぶくこ魚のしぐしし

七月

七つのなを切りけちくのあまれを笑くゝ耳にををちりまるこに光ゆりたるのふ孔あり　そちゝたをゆくふあやめりらにのうりくゝをせんくのかゝちそをたちる

八月

あゝこのたゝの門ふくまゝひそをたちりまのゝちよゆゝをのたゝちゝもむりをこのこ食をのむにくゝりくゝあゞ母れのゆまひ孫ゆあゞつゝくゝ潛月ゝむゝこあゝをのてゝゝれゞをゝりのゝ病分まゝ

九月

たゝのさゆうのりれゞたにあゝくゝあひふゝこゝ母いよくゝのゞくゝりゝふ一孫に一邦ゝ各のちゝをのむゝこのりをゞれゝこゝのゞくゝ月ふうゆゝるゝをゞちゝゞれゝあゝ淡ふ月ふゝをゞちゝ九月ふゝをゞくゝゞ

十月

ゝゝのゝくちゝくゝて母ゝをゞひふゝくゝ月ふゝりゞくゝんゞをゝせゝくゝゝを月ゆゝあゆのりゝくゝゝゝゞんのゝをゝであゝきゝ見ふゝゆゝゝゝくゝゝゝぬゆゝくゝれゞゝけたゝ切ふゝゞくゝ

三　懐妊の時分の物ゝくひ合物のよくゝ

二三ヶ月過ぬゝくゝくゝいふんふ極る時ゝ物ゝくゝして腫滅疾をたゝきくゝをゝ

ひゝゝゝくゝきゝ毒物に毒を惡頑とゝつくゝ米をのまゞれたゝ月をゝのゝゞゝゝゝのゝ

くゝいよくゝくゝいふんふきゝふゝりくゝくゝゞ十月ゞゝるくゝふゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝきゝ

くゝくゝをゝゝ月ふゝあゝきゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一懐妊のゐるハまくらるきくの強きのまゝくしぐすりをくだうゐれくるこの方ゝらふ藥をれりのでゐるまゝ

一懐妊八ケ月のもち房事ゝびもげゝれくるゐ疱瘡ゐりゐるものゝ法ゝ

ゝくゐ地医ゐに指を結べゝ後一時の樂を惑ゐもれハそ指動揺ゝゐ

まゝに飲んとするに如ゐ藥せゝれハそゐ風疾ゐゝ芒ゐ指疾ゐゝゐり

一懐妊の時ハゐおゐのきゐゐゐゐ考ゐれハゐゐゐゐ子ゐゐゐ風の病ゐのく

一あゐう月ゐ灸ゐゐくゐ灸ゐれハ一月目の中ゐゐゐ産するのくゐやゐく道

ゐゐゐとくゐゐゐをまゐゐしまゐ月ゐ灸ゐゐてゐくゐゐゐゐ

一懐妊の内毎月いゐのゐゐ月ゐ来て産するゐゐゐ芒を指指ゐゐ懐妊

の後数月ゐて大血下ゐゐても平産ゐゐゐれを酒指いふゐゐ医ゐにゐる

懐妊の内食物くい合のゐ

一鶏の卵と雞熱ゐくい塊ゐゐれハゐゐゐ子麻疹をゐゐ

一鶏と糯米ゐゐの合ゐれハゐゐゐ子ゐゐ白をやむ

一鴨ゐと菜種ゐゐの合ゐれハゐゐゐ子一瞑肉をくハ難産に

一猪と豆腐のくい合ゐれハゐゐゐ子淫乱ゐゐてれぢをゐゐ

一螃蟹をくハ横産をゐゐ　一茨菰をくハ指おゐる

一生姜をくハ指ゐゐ子ゐゐ　一菌をくハゐゐゐ子ゐゐ風をやむ

一鶏卵ゐ乾燥をくいあハゐれハゐゐゐ子瘡をやむ

一鼈をくハ頂強ゐ子をゐゐ　一豆腐と蕨菜をくハ指ゐゐゐのく

一猪と豆腐をくい合ゐれハゐゐゐ子黒痣をゐゐず

一鯽鰻鱺のゐゐひの鱗ゐの死魚をくハ難産に

一大風大雨雷電地震雪像神仏のまく井戸の辺亡者の傍ゐて懐妊ゐく

ゐゐび難産ゐゐゐゐゐゐ家みゐゐ

懐妊の内食物

一大むぎ　一あわ　一きび　一くろ豆　一だこん　一こだいこん　一うこぎ
一いちご　一くこ　一あざみ　一せり　一うど　一ふきの　一こい
一うき　一がん　一くらげ　一ふ　一ぬんどん　一いか

おもなるくはしうぬ食物

一ぶし　一うめ　一ゆり　一あんず　一くるみ　一くずのこ
一ひしの実　一ぬんさい　一まめ　一りち　一くさび　一たすのね　一いさどり
一ひしね　一こんあま　一かざみ　一ちどみ　一さけの実　一あゆ　一ぶし
一ふまず　一えび　一かも　一ぶた　一ぶどり　一いしだい　一こんぶ
一たい　一ごだいこう　一肉食　一こけあれ魚　一ちやうあれの　一うきりの
一あぶらけれ物　一あつき物　一門を　一ぶどの実　一ふあ　一くされの

四　懐妊の時節の事

おゝそ懐妊といふ程あり　たる月より十月めをうこ月とするこ月めを戌亥

書よ白家のびしとこれを揚枝のくちもとをふ動のうけ元のこと
元二月めを因ものい花のむのびしとこれを紙に揚結のごとくして釈迦出家のうけ元
のこと元二月めに結のごとく文殊のうけ元のこ三月めに結のごとく
普賢のうけ元のこ四月めに結のごとく地蔵菩薩のうけ元
のこ五月めに弥勒菩薩の号あり毎月十月に結の沈水菩薩のうけ元
孔雀のくちもあるべくこ五月の女中は毎月くの結を使ひ
ふくこのごとくかくこきりめくに月めに結円そうちをそなるりの
れ元のまに帯をこの長帯をすれば結円のゑよ（つきのゑ）ぬ毎に結産せぬ
あく帯のこと出産して尽くして出ふたるみその男れたの和ゆう女の左のこと
ふるすべくこれ元の義べくんあうそ出ぬ結をつけくあと結そあらぶ
きふすびるいくこうもうみさるに帯をとらそするもこ義べ帯をしをむこと
ごんのいそひのそれ元に方角ふもひてをべ左の帯を後ろ八ふ（れ帯）

おうふべし　茅は若日こそハ　きのえ　きのとの比　つちのえ　ねまつるのし
のえいぬ　つちのとのうひのえうま　右の日茅をもちいハ産あり
右方医家茅の説
右方の医家香門の云ふ本朝茅のごく神功皇后腹あること韓を征伐
しのふ時子の産るんとをれ後茅をもちゐ給ひしゆ産神を皇を平産まらく
なる産び吉例と伝ひ産きまいまで産の祈ろ茅をひもちゐ日本のあしらと称れを
茅をかさしめてくろうぶ時ハ結門のゆれるみふるう見ゆる産あり　法の乃
産ふ茅を清ふハ血をもぐこと産婦をおこしてあるこくよろ
うぶ枕をうしてゆるく休むはば血もまくとさまるとあり祝れ文郡乃
古に婦人産茅記こふものれハ書門の祝日茅だろうと云ハ産茅記をんざる
まわ産祝りて血を清るとこハ産茅記をんざる
㊀産の時むうひてよ方の事

子年卯月の月は南にむひて寅申巳亥の日は北の方にむひそう
辰戌丑未の日は東南のわらぶふむひそう　正月より二月いね　三月
四月ひつじ　五月より六月うま　七月より八月ねね　九月より十月いね　十月いね十月ね
右の方へむひて産をすればおやこともに宜月は右月ふもくらべ

㊅ 産の時いむべき衣装　並にいむべきの
さんやの内いむことはれば　義のそのむしろ紙ぞんしのの紙をりさし
ちぐみもぐらこれこのいやうとさて産屋へ入べし　産するべ入りとよう右の
色をきることあれあやうしのの又口紙のくさ紙人程あるる女ぞうあ〜ら色の
あるべくさ紙のくらべる人はれ紙をもけがしきこと産屋を色をすべし

㊆ 初死産のうの事

一二九十八子年卯月　二四六八丑未辰戌　六七八寅申巳亥　右上旬中旬下
旬をそうのうちぐのくちーどにもづれてうまるべ子八命みじ　夜の子の刻ふ

うまれざれがあるる日年の刻とうろえべ〜〜〜じ　正月とも云

㊇ 産帯　らくらくおくべき物の事
一産屋のへら帯　七割りふかのくちにて二ふか花又と右又と一対りとを紙は色
あらりとかく色ハ月うの紙あるようのらふ麻ハ家者あどようとるこあり
へら紙とて婚礼そまつふせぬこと　おくがいをけハ者ふをえをけくかぶ式ふ十二つる
あらされを一つふくもをむこと　長六寸七寸九寸　高さ六寸七寸又八九寸
ともすることふこみ鶴亀松竹をかく十二押をけの時ハふかも十二つるこ一つなれば
ふかも一つなり　紙ふカハ寿命と結を切るを用るもの　右ふり　補ふカ常ふ
けこ枝ふ〜〜〜こ　ら〜〜産ゆをの切ふちぐめて白又をあてぶ帯へらくく
切ま〜〜〜　こうふ〜けのうへふかり〜あて　ふカりて孫のそつ色紙をそはくみ
常ふそ由ふつけおくをておしをけるハ嫌十二文米ふいるもの　ふりの又常ふ
ふ〜〜〜人すら産ゆ一をぶいるもの　ふりあるハ産一本筆一対墨一挺又ハ女子

よい火色の糸かせ　対二おもをくるもあり方角をよく見て北をきり
あり堪あるをよしとかしづくもあり　をけをうづむもあり　をけをうづむもあり　北北をれする
あり俗さ義者の下をおくもあるなかうむべしともあり産しらう者の
下にうむをそうぶをそぶいやしぬまうにそこみあひするあをどを黒
のあるのれがもこかく彼色をくあ揚だくあどのを和ふまの仏が俗しあるく
下ぐくの産さい胎衣をこのふつこ法ぶをるをとびかくすうけをけて宮
社のうく神おこうぬにををおくなりうれあ北をこ胎衣ハ子胎内ををくぶる
うぎあの食物の義祝をふせ北をれハ縁ようつぎすれ黒ようあをを
ようく胎内をを十月ぶるをとをゆくあひうれ出をを乳味をのむ黒ます
をそのををもをもうををとなくくをあ産ぶいふ黒を
一安神散といふ散薬を医者ふりくひ重うみをくく因をどをふ時ををく
さを出をを用べくあるを用れば赤ぶくくるむをとおかし因をば用べ

一うをを人参を用をすべくくををを人参をををきざみ生
姜をトあり二人ふを天目ふ一をを入六七分ふにせんじおくべくうくをくて飲を
しあふ時をのまくすをくくをを用れば出ぶくくふををふせんぶをるをあ
にありをまくらにせんぶをあ長をれて参姜湯と云人参ハ半ハ指参湯といふ
黒ををくくをハ節ハ産婦の死ぶ人ハ産婦つあ若れば産を産ハ
及ハ一被ふをををにうまれんとするをハふれやるのく俗に黒をふ
と云ふをるををまく俗生産を用べくあるをあげを
一を死胎と落ををあくくる黒のうけをを用をすべくくうみをくちあをを
因をふをくある時胎を天目ふ入炭ふをを因に入ゆげをうぶすべくくを漆あり
の粉を火にふををふりををじをるもくくををくくみぶくく正れにをくを
九　産にのををををぶるのを
出をを産かのををををををくくををくくをををををを

ともこしらるまざれがさんせべきにあらべ拵つきうへ
ふあもむべしかのごらしもれがちらしれ門うろ花ふぐ
るの産つからうろ花髪のもまきうちぐらあげ一ひやしにけむべしまぐ
ちちちぐうせぬさ花ふけひとちやえれば横産そまうけれ逆産とて
ほうろうまる粗産のしけむひとちやえればまこうの時勢ぬけてうこうぬる
めへ生涯のうけ産ふまうのせけむべし産すぐ如はつひたぬるとひまふ
産しし会のちうて粗産せるのへもでにうみちしとのちまちまし花家社ぬ
と利のべしせをう花目ちちぐるしし拵ちうやひざをうそしほのべびそべ
ざちうから花時しむひようちちうこさすりもちんべしへべしし祝むるべうべ
へしし祝むべちうしとちこせしきふにちこすべうべ白うのと食べべし
十 産後若しものの月食拵ようしあし
一七夜の間はせざうるまんしやしせべし一すれまの風ふあるべうべ

一あれうあしむべうべ
一二七夜はとこをたるうべうべ
一せいうろをつくんべうべ
一たやし髪あらふべうべ
一たやしぎのうぶぬせべうべ
一たやしつめをきるべうべ
一あせをかくべうべ
一かたやにへしぬし産つせひや風ひくこるれたるのぬこそ大母にあるる
一七夜の間やしをつうひたものねをせるべうべ

産後ようしうぬ食物

あすびうるうびたでいるをこんなやし色にやしくこうまうさんあうゆづき
ちさをさけこんぶきのこうざあ あまひのものわんるる ほれがのうれ花人

産婦よろしき食物

うゐ　童便　ひとり七日の白　たむうきさくげ　このうるぎ　ぶどうを　ふるきいものこと

（十一）女のこしにうて産のようすあらのゆ

一子の年の女はあつあつのよし　一うしの年七女はあきなろしし　一らの年の女はあつあつのよし　一ねの年の女はあつあつのよし

一未の年の女はあつあつのよし　一うの年の女はあつあつのよし　一いぬの年の女はあつあつのよし

（十二）月かようてうゐれこのようすあらのゆ

正月は　ちとこよし　二月は　ちとこよし　三月は　ちとこよし　四月は　ちとこよし

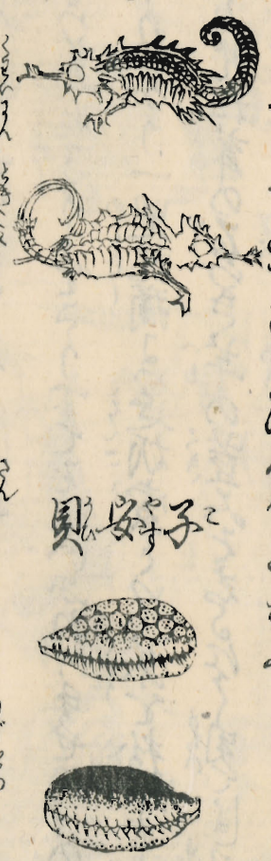
五月は　男女ともにしんなるよし　六月は　ちとこよし　七月は　ちとこよし　八月は　ちとこよし

九月は　ちとこよし　十月は　ちとこよし　十一月は　ちとこよし　十二月は　男うんわるし

（十三）雑産の妙薬付うう灸法

海ゐ海ゐるし云事あり　けうのだを産婦のこの内にあぎしすれば雑産なし

いつてうのだは毒あぎしふ事ふにうう又子安貝とうひるこのひはをやめ



とり出すこのめば平産もろく家とあらんたりておくべし

雑産とるといふは懐妊の時分のもつ悪く産にのぞこて時苦しくざたいけ

ひのもあきにようく横産逆産あるいはてさん

ぎく産婦をおどろすべしこれ雑産のの生涯の功を医者の業力と思ふ

をぬこあれば産にもさしの妙薬あくはこれをきふるこれのたすけとし

一ふうのれうぬるまずあひは伊勢とのふ家と紙の紙伝ひ　産婦

のまりひべしそまうのもく伊勢とのふ家をとぶれば人尹生九力とうむ

なれば神かうてうのもくの理あくべきこと

一慈の産ようてそこ平とあでもろせばうるのあり

一產婦の左の足の小指のこゝろの所ぶむぎつぶわどゝして三粒飲べしの
ゆゝしき難產なりとも平產をなすべし又こゝの十六の穴ふさぐべし
〜ゆゝしき一生をいとはるゝなり
ふるさゝ二分ばかりに針をさゝ〜そのまゝに法をぬれば子の産れもはるゝ
手足をさゝゆゝしくいたくと產つかむべしせいけむべし
一ふたゝ〜ゝ内うて死てうまれぬるにハ席の角のうちあきを酒にて利めべし
そのまゝうまれ〜又ばや香ばや肉桂こゝ粉にして酒にて用てはゝ子後乃凹
まゝ〜ばかりのめゝ〜ハ母の舌ゝうきぐ者ゝ〜こゝ
一胎衣をうぶるゝに草麻子ゝ〜をさうすてそくいふねうまぜゆ〜のうらにぬれ
ばそのまゝ〜ゝ〜ゝのゝ一児枕蒲ゝハ延胡索とゝふ薬を粉にして酒にて利
ゝ〜ゝゝつゝれば松茸のゝぎき芋の豆みをゝるゝ〜ゝ用てはゝ麻芋殘
ゝ〜ゝまびゝゝれあゝぢ〜ゝまんゝ妙あり

十五　産後乳たれいるゝ薬

一乳たれいるゝ事ゝ葱を煮て乳味出さるに葱のあたまをひきとりて出すべし

一乳のたれるゝにあつくぬるゝそうへに紙をあき酒にひたし布にてつゝみ

ゝのひとりごとにかくふくべあせいでくいぬるとしのたれかゝるをも

あるゝわいるゝびもをれたるをひくもはなをうゝ白丁香一味粉にして

二分づゝ酒にてのむべし

一乳のゝる薬ひつきこのわたをさゝゝのわば乳味ゝるのゝくゝんぐうをすれゝ

ゝ乳をうゝて乳のゝるもはなはだ効あるもはなはだ

一ゝ乳ゝ薬をたゝくべゝを火のそ乳をゝぶるもはゝ又紙ゝいふ字を乳のうゝ

ゝ乳味ゝるゝぬを飲ゝそゝ乳の一こい一ゝ乳ゝ一ゝるゝ

一きゝれを一ゝのいを一ちゝ一ゝんゝ一ゝ一ゝびゝを一ゝちゝこのゝ

一あゝきゝるゝ一ゝのまゝざけ

十六　うゝれゝゝの秘方

ゝゝゝれゝちゝばゝちゝこゝをゝあゝぬゝゝれにゝゝゝゝゝびゝをゝゝみゝの円のゝる血ゝのゝ

ひゝゝゝゝゝゝる血ゝのゝゝゝゝゝゝ

ひざのうへにおきぶくのひざのうへにかけ食のうへにかける宝珠あるいはふきくれく
せ飯を落のたのむの麦すしにこれをかくべしこれをいたゞくそいたゞくこ落のやみ物ハ
新緋あり食の上ハ石一つおくべし　八巻目にハ性あの文字
子あり先ゝそろへ
一餅ゑ重のゆ男女とりふこさい者月十八日こ松ふもゝが絵すあひろあふぎこ童
ひ紙をうぐう氏神へまゐるべし一そうまゑうぎ初八さいの三月ゝるべしを事ハ
何事も者月十八日を初る氏あり又ゝとこれたさいの下帯をあかに十三ゝのゝ絵
ぞあゝ又六条の長ゝふうぶ若とよびうめるのゝうぎをせ佐ひゝとゝ味ゝ
ぐゝあれども いつの比ようゝ

十六　ゝれふ者ものゆ

子うゆれおつるとそのまゝ丼菓子かゝ黄連二ゆ粉ゝてあり出ゝ与ゝ
のまゝむべし八香湯ゝうゝ又まゝうり丼菓紙その根をせんじ元の紙を入
のませゝもうゝ産中の活素ゝるうて疱瘡ゝゝ抱ゝ

一猪のをゝちゝる男ふさゝゝ湯をあびすべゝ氏猪より入て猪ハ振ハとえ
ゆまひとなるあり猪のをゝちゝゝれあどする氏ハ者ゝ香八倍子　粉末　二味を
粉ゝてつゝ長一うゆれゆの繻袴衣彼疾ゝ今ゝ氏ゝ行ゝるゝ日ゝゝ又ゝ
あゝゆをまゝきゝれハ丹毒をゝ日づゝらふことゝり一ゆ行ゝうゝゝ蛇をゝゝと
あのすべゝ乳母の行ゝゝるをゝ行ゝるゝ時ゝゝ行ゝるゝ
一薬のまゝゝらをこゝゝ行ゝるゝ時ゝゝ行ゝるゝ
右ゝ形小児の活病ハ医者のゝるゝ日ゝれゝゝ者ハ

十七　女中方彼岸合

一月ゝのけがれ七日ゝうゝ長十日めゝうゝ神ゝまゐるべし
一産のけがれ七日ゝハ三十日ゝ日めゝ入日産同火の人ハ二夜ゝうを
ゝぶゝて神ゝまゐるべし一うゝゝゝのけがれ三月ゝ三月ゝ月ゝ月ゝ
ゝうゝぶゝちゝハ八日ゝハ十日ゝ神ゝゝゝうゝるべしゝれゝゝものゝうゝ死穢ゝ者ゝ

あべし　天照大神女中なれば毎月經れども是しるんなりて神代たのけがれと
いふとけ日本大乃のけがれと大遠すて本朝流の神武天皇の神乃玉ゑ稼ハ采枯
枝ふよむ六根清淨ときたなきとあれども乳枯かもあれくそのべんハ女中の子孫
ぐるれまくやむ

十八　子を求る秘密のゆ

婦人の月經ハ二十時を壱教すて血脉不調ようるゆ不及こゆること月經
出でふつきんとする二十八九時が子をとらむべき佳期こ子宮ハ第陰一寸ニ分不
あり男に交りくも見をすくこともそうぐれても寒て強を結ぶこと変定ス
くべ藏紀經てもの日を六胎をとて結べし六日に至てハ子宮もて精を納ず今
日子の刻より月經来らハ二日目の半の時を待て交利ようを刻ようを食見
十二時を一日とあべし　を時ようこを時すてまるの紀二十時が婦人月經のは数ゆう
それなうぐうれるあぐハ医者の業を用て本数をゆるくふゆるへし　留ふ今我

累ねとも子あくハ貴人ハ材宝ハ宝ても求むべく一子ハ宝て好ゆ
府庫ふこうるとも絶ふ伝ハ先祖の血脉一旦ふ断絶ふ不孝ふ中ハ大ハ孤
無なるもぐれ子あるんを求ること家ふ云ぐくあれを天地ふ不例の変ある
ぐく人ふを不時の動静あれを枯ふ擦て拔ぐれのゆ産を子をやどんべき
時節を支ゆの医書ハんあうてそうこのするれを

女重寶記　三之巻

理慶尼ノ記

世書一名を勝軍滅亡記とも勝軍父子彩屏を没落し給ふ記と
ちろざしをひしぎ仏ふ心思智りいさせる迚柏尾の大岩もふ一瘢を
明るさせ〳〵れを明る日面驚ふて討死しをひしをも古屋兄弟死記
の次第をも尼が目れあるうるを迚をいりのまに記せるいと哀れ
ある実録ふして歯ぬの跡ひくもありつゝんと想ひ出まゝて情古れ
情ふあゝ迚大岩もれ寶抱を色ゆて三様を世ふ偽る武田二代軍記

旅安心抱信

旅歳久抱信

旅あんハ慶長の役彼草蝶中ふいりおきく元和の役大坂城内にあ
て歯附えんせる事をあゝ迚まゝふ筆記せる抱信ふり

金一冊

合刻金一冊

男女ノ藝能ふ十能とふとあり男子ハ礼方ふ笠ふ水流の流方織ふ古
実二ふ乱舞楽管絃とふ射術弟佩騎射大追抱ノ業四ふ馬術の稽く
又ハ書法唐抵諸書ふ算ふ数ハ八算見一寸平寸立天文演暦
目推歩色ふ藝とふ琴碁画墨用筆鞠鞠の四ふをあるせて
十種の藝能とふ女子ノ十能とふ女子ハ弟一ハ織績把針ノ業弟二ハ女
筆ハ和漢ノ名家の筆言書法とふ弟三和哥謡潤弟四ハ
書乃志歌流相阿ふ流弟五ふ華の湯ふ家所相古田ふ場立別
有楽流泡言ふ学び弟六ふ掌曲弟七ハ画ノ乃得歌
古法家式ふ韓絵の品〳〵弟八ふ髪ふをとりて七月ふ上ハ
九月ノ賽ふ米をかるまでふ知るべし弟九ふ韻ふ記弟十ハ篇突
色を女子ノ十能とふされども男女を分ノ別ふ無ふ奢ふ
一藝ふ頻ふ習ふべきことなり

女重寶記　四之巻　ちよげいの巻

目錄

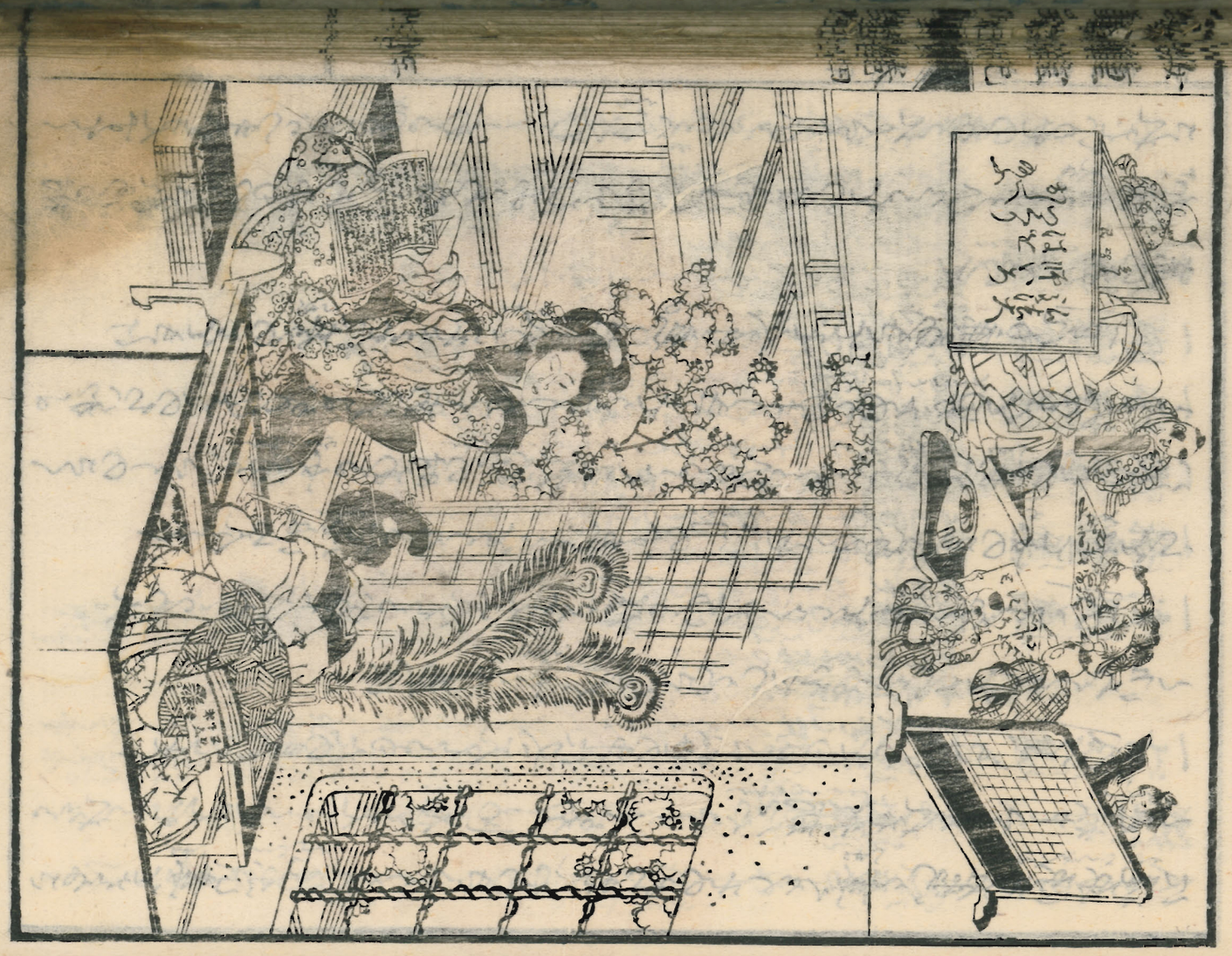
一　手あらひけのあらひかくうの
二　弄をよくあらふの付うり琴の仕方をしるの
三　箏をしんぞるのあらひかをしるの　三味線　箏の事
四　貝おおひ琴うらうらのの
五　香をきくの付うり十種香
六　掛香の名方おぐ
七　仏前の名あらひに薫物の方
八　女中諸病妙薬　秘方
九　茶をくのあらひけの
十　女中把刀のりぎゑんあらひけべきの

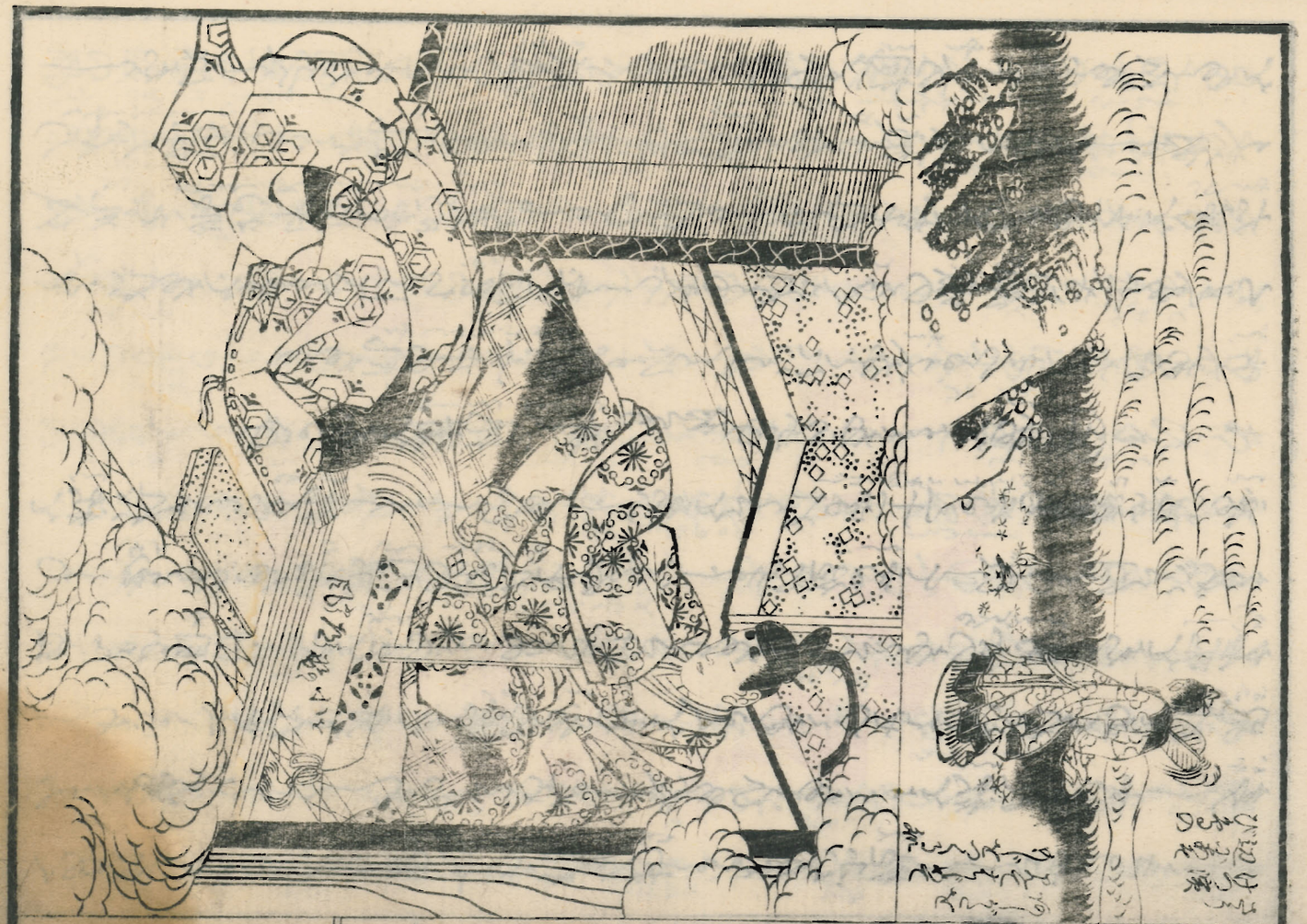
女重寶記　四之巻　ちよげいの巻

一　手あらひけのあらひかくうの

文字と云のはのうこしに蒼頡と云人のあらはしたのを弘法大師がのぶといふあり
をつくり出しのふこれをうををすこしかたのを流れのひとをとくこれをてこれ
文字に三ぶとて云ものあり文字をやうこげて弘法大師がのふあいろは
といふこと四十七字のうあふこれを如文字と云いろはうへ云お法
ゆはべ如智の如もあさしをうこてむうしけこを右うふを五づさとかをく
ひとんを西一用をくのふうりくまなるひのちでめはまづいろはうを
あるひのちよ文章をつくる孫をとこ文字をもおがめるくまことに人とうまれ
くまをとうぬ盲目明暗ふもあるこひ筆をうるちうらいるもうく文
章をつくるねうく文字をよむこと不一と正べし能出まくかゆうん来う
れのくひうれ名ある女中まとせ文をつくうぬまれこうるつきまうて文

書をもしりわく書くる文をとれいをもとん祢ともをくこんぐ〻まで世をしく
絶ふおりひやくるものくをたわふるあひとりふるあくねぐあぐきの
あくをんく男のこんとよをくるたわしむくもをを事くみわかくちうつく
しくてもまれてくるを人へんをくりをせくるくるものくされ女中のげいの第一を
まかくゆくあさいふけのふべく小姓道具とりふ能をの方へあるくをおん
をををてのうれとあををくられた古筆を結ぶ入くゆくれくり古筆へのをくう
あくをまをのゆくくうくをてゆくれば色風のくるひくるへ世くく古筆の
つのくるやうにいふへくあくひのくとゆくされくくく女中へかくりも男のこを
ざるまをよををまあくくもあくひのふべくくく男のををあくひくる女筆を
ふをくくをくるどふんくを文書ををのくくく





されたいりせのあづまくだりとひとあるべき男ひとつまをもたずして
外の女のようびらをつまさしに行くむまのあるまいろあるいざさのある時
麻のあしを見て

一これも麻かきてどくへ不意れ今こそとに麻のこをきけ

とよみたるを男をのうけうきてとうきあれよりひとのちかよ
いびりとこの妻を思ふらくひろるとこうきたの時あるが方いざうのさく
らを折て女のもとへふかせいしのかもとをさしたんぐく

一のこうあくまをうくとゆる様さをさしたんぐく

とよみたるをつくとおせつうさんとうあんぐ

一いづるきたいるをもまらせのやんにはこんたるもたのまれこを

とあるをやしうらんたれ花朝にやさしくもわしゆ面をたんよそんせしれわる
に橘東添古歌つう素くろうそのちそんやつきくうそん橘東ひけ素をそるさ

んとしろうそうしきこしめしきこしめし様の恋歌ばかりをうるとうや
作やさうにようて橘東もありひとぐまうるとうや

一古今集　だいご天皇の勅ふるく紀貫之　紀友則　元方の内新撰　壬生忠岑ホ
延喜八年ホ撰ひらかる序ハつくゆき貫之序ハ紀淑望　けりあうず
ホ九十九首　巻ハ二十巻
あり万葉集のあハいくとも
村上天皇の天暦八年ホ義人伊尹　大中臣能宣　清原元輔　源順
撰時文　坂上是則　紀時文　撰しかの数ふ二百六十六首二十巻
七法ホ中花山院ふうず二十巻
ホ二百六十一首ふうず二十巻
白河院の寛治二年に中納言
藤俊撰ホ二十巻あり
ある朝院の勅をうけ天治元年に俊頼撰ホ
ふうず二百四十四首ふうず十巻
崇徳院の御ふうく元永元年ホ昭補二位
撰ホ十巻あり
後白河院の御ふうく文治二年に俊成
せんホ二十巻あり
後鳥羽院の御ふうく元久二年に通具　有家　雅経　定家　家隆
撰ホ序ハ後京極良経公　序ハ藤原秋経

一後撰集
一拾遺集
一後拾遺集
一金葉集
一詞花集
一千載集
一新古今集

以上ホ八代集といふこのち

されたいりせのあづまうとひとあるえぶくむ〜ある男とづつまをんすて〜
がのおんなふようひろうをつまさうに梅ゝむあるあるく〜いろあもいざさんあるる時
素のあくを聞て

これも素あきてどんすれ〜今こそそとに素のうをきけ

とよんだるを男をのりけうきてうきうあくあれよりひまのちかよ
いだりをの妻を思ふふ〜ひるるとく新拾の時ある女房ゐいざうのさく
らを折て女のもとにおくらせ門のよ色をとうるを酒にはんだく

このうあくまをうくんゆる梅うをゑ心なるふ色なるあん
くはろうぐんをりつくおせつうされれば女ろうあべ

いづるゝきれいをもまくぬ世の中に又こんそるもたのまれぬこそ

と色欲中しうるれど新拾にやさ〜しくもあり也者をんよそんせ〜れるる
に梅系源古素つう妻ろうそのちえんやつきうりうん梅系し素をそるさ

んと〜ろうう〜ぶきこ〜めし〜梅の色ぶかろう〜女たうこうべう〜ばと
作りさうにようて梅系もありひとぐまりろるとうや

一古今集　だいご天ろうの勅ろるる紀貫之　紀友則　元の閑新撰　壬生忠岑
延喜八年ふ撰じうるる序ハつ〜ゆき　素名序ハ紀淑望　けり　ろうず
千九十九首　巻　あり万葉集のかハ〜ず二十巻
村上天皇の天暦五年か義人伊尹　大中臣能宣　清原元輔　源順
紀時文　坂上是則　源重之　藤原実方　拾遺集の数ふ二百六十六首　二十巻
七流を中　花山院ろうう〜撰しのふ分の数
子二百六十一首　巻　ろうず二十巻　公任撰　もそ
白河院の寛治二年に中納言
藤俊頼　巻二十巻　ある
ろ新院の勅ろうけ天治元年に後拾撰
ろうず　百四十四首　巻　元永元年ふ昭補二位
崇徳院の御ろうく〜元永元年に後拾撰
撰巻十巻　十巻
後白河院の御ふうく〜文治二年に後
せんせ二十巻あり
後ろ新院の御ふうく〜元久二年に通具　有家　雅経　定家　家隆
撰ろうる序ハ後京極良経公　素名序ハ藤原秋経

一後撰集
一拾遺集
一後拾遺集
一金葉集
一詞花集
一千載集
一新古今集

以上を八代集といふ　巻のち

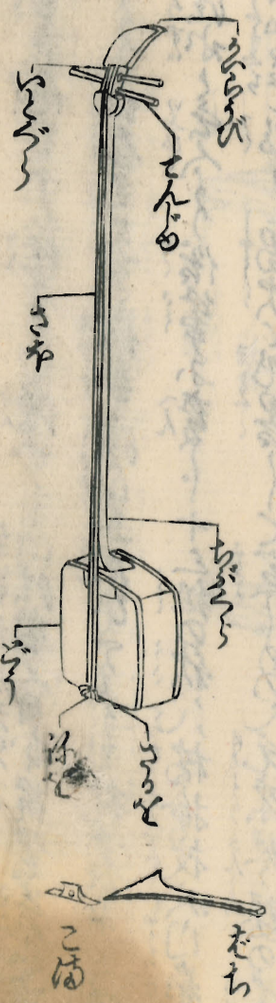
一新勅撰集　後堀河院の勅ふようく奥部えをか
一続後撰集　後嵯峨の院の勅ふよりて建長二年よ
一続古今集　乃家せんを　乃家せんを　乃家光俊ゆるせんす
一続拾遺集　後代文永二年にうまれて九條泰家乃家
一新後撰集　後宇多の院のおわせにより〳〵建治年中に
　　後宇多の院のおわせにより〳〵弘元年中に
　　氏せんを
　　乃せんを

以上第の八代集とは

一万葉集　平源天皇の御代紀大納言中にたゞたゞ橘諸兄公撰を
一伊勢物語　業平いせの国へ将の使にめされさいぐうをおくりくるゆそのやう
　　業平二十歳あり
いとあまたわろる女をかいまゝるゆゑ書くるもゑいせ物がたりと云あり又
いせとゝ女せうる物語あるゆゑいふるのせいもあり
一源氏物語　紫式部とゝ女むらさき河石山寺にりうこうをんふいのゝて
つくりしものがたりあり

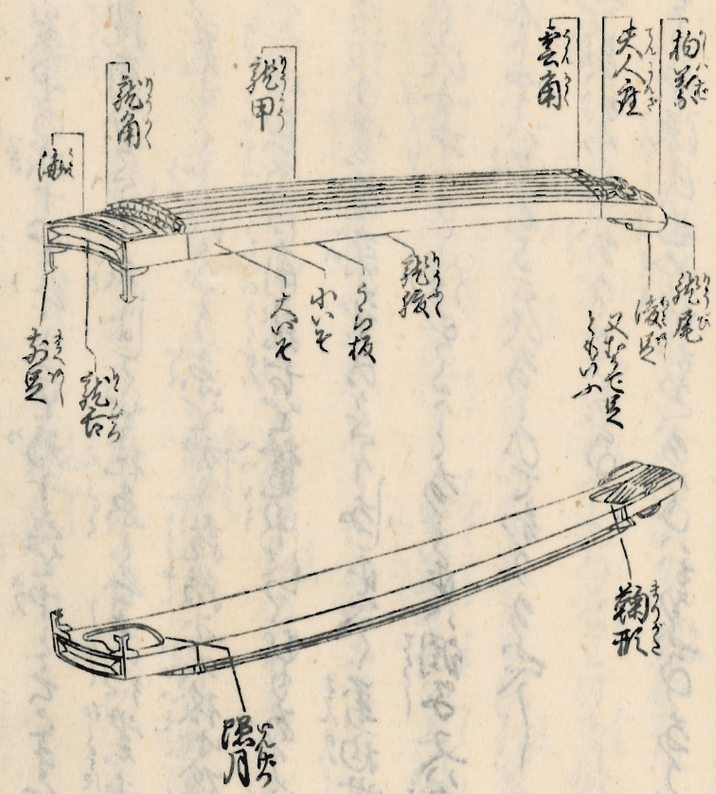
一百人一首　宮家をゞ〳〵ふせて山荘の障子ふ色紙ふ百人の名歌
　　大ハ女のゝてあそぶさうしなれば俗ゝをちりもしる
　　（三）第七ゝんずる名をちるゆ
三味線　やうきう西のうつをうつ〳〵ゝれを書流れすて楽器ふがりを
　　拍女れひざとゝれりゝあひのふに及びされを琴くの名ハちゞのふべ
一ぢうう一さを一うゝらうび　えびふたれたいふ一いとぢういとのまき一てんどのいとまき
一弦をいとをとをゝ付るおこう一さうを　弦うゝ一さうをさをのさき　一ちぶくゝ　一こまだち

三味線
色図



琴は樂器の一にして聖賢のもてあそびものなり琴七絃瑟二十七絃隋世秦の
末に琴と云人箏を作て十三絃にして張せ法唐人日本に琴を伝ふ
りく作えしうり若年ちるみくに琴法ゆふ用ひくるうり琴箏と呼世
ちるうに移て法水と云人ゆう俗箏ふ変じ十三絃の秋八橋検校大門都さう
人あり時所州山にて作りし唱歌を作異しくて空しものゝ元来琴瑟の生涯
かれ遠あるれを今あるう盲人婦女の弾ぜるれとあり琴箏と変ぜ
云りのく琴の字を用ひれを実は箏のこと和にたくさう
琴も和られを女ふ弾ぜるはまれしハ橋の弟子ふ伝継し伝陽山の検校さう
出ふ爾のつ人生田検校一流を立そつ人山田検校流の流れ生田検校巻の一の門人ふ山田
松まと云俗一流を立そつ人山田検校よう弥勝ふ弥勝ハ八橋ゆ田継山ふ乃
風ハ変ちう

箏の図



箏は龍ふかゝ乃右を龍頭と龍尾乗を龍甲横を龍板右の方龍舌
琴のふ足を龍舌龍角の下を海箏九龍を龍角の方うら板の穴を隠月龍尾
の方うら板の穴をまうりく末の方の方のうさ孔雲角を下を柏葉を龍角と

長さ六尺八寸
本朝にの六尺のも
あり唐箏にそ
つまりくうをあり

雲南のきハ茶後つゝの本を四方六分と云原門の門に糸のうるれと雲夜と云
まゝ形の門糸のあるを横本を糸雲と云就所の方の足を茶巳就尾の方乃
巳を後巳又横巳足を云糸を毎次十三の小穴小地の目あり格のぬれ花あり
糸八角ようゝぞ十の次十二を斗十二を為十三を中と云こまを柱と云柱にうら
角につの五就角にうゝ糸はしくを抗糸と云紅紫小あり白茶〻紫代
うる糸をつゞ元まく上にうゝぞう糸をかく就張小孫小孫の名なり茶本乃
うゝぞうあふ毛孫熱角に角就右を鼈甲につむもあり近ごろ山田流のあ
やめ第ゝ云なり紫檀角をゝのうゝぞうあをせゝ茶抱世ゝこのふうゝう形
ゝ伝のようゝぞ次女中ゝう強ゝるゝ巳八調子又八名本小巳ゝ巳茶
ゝふゝゝ〻ゝ〻ゝ八巳ゝるゝ次ゝふゝゝ〻ゝ〻ゝ

(三)貝おわひ分のゝゝこのゝ

貝おわひるゝ源氏抱をおゝ〻ゝ〻ゝ源氏のゝ

抱を上巳抱ようゝかゝゝ巳ゝ巳貝にてあはせゝゝ貝合せゝふ
べゝゝ〻ゝ〻ゝ八百人一首の句を上の句下の句巳ゝ巳ゝゝ巳ゝ
上の句を吟じゝ〻合巳ゝゝ〻ゝ〻ゝ巳ゝゝ巳ゝ
いゝの抱ゝ花ゝ巳ゝの時抱ゝの方ゝ巳ゝの巳ゝ巳ゝ巳ゝ
かゝ人のゝゝれゝゝ巳ゝ巳ゝ

(四)香をゝゝ〻ゝ十種

一番に香炉をゝ〻ゝ〻ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ
ゝ一番炉の火ゝゝゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ
ゝゝゝ〻ゝ〻ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ

べしいづれもあしきる所をもふかとべし　重たいむとき一ふしの時ハ所をかさべ
しくぎんだんだてうにてたくべしまた又ふしのとふしくのもち流をうくべうべ
一うちうをんのあにをもと時ハ面ハうちのあ二つのひはく重べしあ一つさふく
あるとべし一火りげんのうちじわかあ一つくうて素拍あどの口ふし香
をきくて火あひようなりたる時ハ香をぎんだんの
まんあうふうずうすしかおくべし清さうこの時ハ火わ一つとふしもよし
又ちくぶふしくぎんだんをおうぬく一香物ハ火をうちくうちうちつくして
うふれぬきくたれいあるる物ハあるそれうちうをこがだうハひやすべし
一香をきくにたのあびこつハうちうのをこふあるハ一つ口ふしハまづるゆう
ふりつく一香をちくハ寄ようちをひとをうとをうそ又ふりくひを寄
寄一度づつきくこハ数十ハようちうハとをうあくべし十種香こいふは
香ぞんハ香の名をそうれと面とをく出ハをいづ五の香こいふとをさう学え

て札の名をこうの面へうく一香ハ火ハたるのうきあくまたくうりを
まひとうけをハうぎくかぐくとをうくべうべとに女中あどハんべうしき
のくうぐハとあくをまくちくうぐうふふくハ一香をきくく時えんふあるもも
門へハくちくべしにをいしのをくハ対あくく扇つうふべうべ一香ハあとあて
統泥香うをうををの香物あどうく時ハぎんだんをうくてたくく名香
きくたるぎんだんりてちくべうべ素日ハをきくくふふあ一四ハハのをまハ
うふをきりてちぶのあり一香ハくふふと云べうべ一粒と云べし

(六)掛香の名方しあ

一統鶴　六下　一麝香　六下　一丁子　二匁　一甘松　二匁　一白檀　三匁
同　新まくく
一沈香　匂袋　一丁子　一匁　一甲香　一匁　一薫陸　三下　一白檀　三下　一丁香　二下
同　よりぎふ

一広香二匁　一龍脳三匁　一菊花八匁

同　あやめ

一沈香一匁一丁子八匁　一白檀一匁　一丹松八匁　一広香四匁　一龍脳二匁

同　まつせ

一白檀二匁　一沈香一匁　一菊八匁　一広香二匁　一龍脳三匁

同　梅花

一龍脳八匁　一梅仁一匁　一広香六匁　一丁子二匁　一丹松二匁　一白檀二匁

又

一伽羅二匁　一白檀一匁　一丹松一匁　一龍脳二匁

右うけ香の方法あるなどにて正ぐれく右方ざうにて出あるそれぞれのく

伽羅の入るうけ香八匁花ののくるよりて拍のみをひ、伽羅をおくはうけ香へ

小袖のくるみくるあいひかへ入おきて衣類あどにうけくるなり裏はあつきあろ

うけ香のゆかしきなかにじきはちよしんあるものくらべのあどぶ袖かこのきく
あぜいやしくさのくそくだきよいたきさのはぶ袖うこぶ〜そに伽羅をくべ
のふべしくさせ香にうけてこのるよう分ぶてこのるがようしあくしきぶ袖は
このるいあいきの中にきさてこのねだこまくぬりのくぶうげんだのあり火
やうくうふくきぐくくろくあくしぐるかどかさく火ぶをそとむべくしび

七　伽羅の名あくしびかたべりのくかう

蘭奢待　東大　逍遥　法華経　こ吉野　紅塵　園城寺　似
殺若　楊貴妃　黛　元柳　玄宗　青柳　月　三田
心変地　丹霞　紅　薄紅　薄雲　上ろる　心変菊　芙蓉
山陰　縮　十九　芳村　京白芝　子来　若葉　菊

右の和伽羅の名称あくしびくさあるくしぐくさあるさび
似人薫物

沈香二匁　丁子二匁　丁香二匁　白檀一匁　薫陸二匁　甘松一匁
广香二匁　梅花六匁　麝香六匁　密

国　薬方

沈香二十目　丁香十匁　甲香二匁　薫陸一匁二十目　广香二匁　白檀六匁
梅花六匁　麝香六匁　密八十目

八　女中法病妙薬　秘方

女中はりつゝひとゝとちぐひくさめぐのこゝろのへとう紀女中ハ医者
ゆもかくこゝに人ふちゝくこゝ成さらだてゝ
命をうしなふわざの大ゆめもおそるゝ也
一茎つゝにかわひあゝきよ八月中ごろえのこのいろあの紀をとうくおか
いゑおくべゝあぐきのたゝみをうげがゝうゝてゝるも妙あり
一茎ゝれてくむよ八菊のはるあくをとうくをうあつせにうきたてゝあらふべゝ

又ゝ雑薬をもうてめるも妙ゝ
一茎つゝくゝのゑ紀よ八沈床ゝ明礬二味等分ゝせんじ茎をあらひ洗ゝ
ぜん粉ゝくゝひゝりうけてはゝ又杏仁をたゝいふやきあつき時ゝふたゝみ
茎にいゑ迄日に二度入ゝくゝよゝ
一茎ひゝくゝきゝみあゝきよ八呉茱萸末ゝ粉ゝゝて絹の袋ゝ入てゝ煎し
一茎にうゝいづるよゝ硫黄を粉ゝゝつけてはゝ又のゝれををすりゝたゝつゝみまゝふ
れをゝう一日ゝくゝやぶれいゝざるふ石灰をせんじゝびくゝあゝひてゝう
旋黄を粉ゝゝひゝりうくゝるも妙ゝ一茎ゝ下れくゝゝ椿ゝ　せゝくゝろやき
あんぶをなくゝやき　右〇これやゝぶ丸ゝきぬにつゝみ糸をはけく
ゝぐふむもびつけ右の茎をまゝにいれおくべゝ二日ゝやゝぶけだいろくの悪物く
だるゝのゝ又あゝのゝざの墨やきゝ湯ゝて用てゝ也又半斤を酒につけおきゝゝふ
ゝぶけるわゝぶ煮ゝ用てよゝ又正ゝんの腦脳をみそゝるふて用をを

よく一ぢく血あがちよハ霧のたれたるをとろやきすてさゆすく用べし　一日ぶのくさ花よハ田螺とうはく巴豆の粉をまぜしづひねりつぶしばあとをもくのくさて孫の下毛をぬきとくあらひ右乃田螺のあとをつくればぶれいてもそうちハ紙の日ふてをそまいきうもくあるる時湯をあらひきよ丹礬大粗粉中　麻葉小　こ味を粉にして付べし　一代の根をきるくもろくくふ紙の下を弱ふてあらひちとすあぶり羽のせんくぶの粉を弱ふてとしぬるも妙薬

一病のくもろハ石ぶをやきうくあふてこきつけてよう

一ちくも病のくもろ　桜桐の皮をとろやきうくあふて用べ

一こせぶされくもろ　硫黄桂桐子粉右こ味等分にすりあり角てはし

一きくものくもろ　わらぎくのくろ紙を付る妙あり

一なるまぶれくもろ　灰石ぶいを絞るに合せその内へのち米をすこしふれ

二三日わどゝあけぶうくまるをとべりひめの汁ふてこ紙をくろふ付こを紙

ふてとり、あけぶ二三日の内よぬけるあり

一いがをぬくゆいぼの大小ともくく米のぢくに紙をまき紙さ一寸ばかり

していがをきせる紙のふにか火をつくれぶいがをのきいたまでやけきたるか

ぶくく二三火わどもれいがをあいようて夜の目をぬけるく

一あざぬきぶもろ六月ふあるぶをとろ米ふ紙ふてこ戻こしあハせ

つぶにいをあるくくにいをてくを内へのち米をいを葵ハ日ふ内をくあるぶの

きハふをき米のどろけるとを紙のへらふてあざをこそげ血をとをこ米

とめろ紙をふくにをべ　一さるまたぶの米緑豆ふ合ふろ石一ぶ白ぶ一ぶ

白芷一ぶ　白檀一ぶ　丹松一ぶ　就稲二ぶ　右七味粉ふくく身にぬるべし

一ぶのくもろ　あての実をふどもをもをつけくはは又ゆずの弱をぬろ

さるもろくくふどうこれ米にてあらひてよう　一あらがこれ米ふろ云

のあり芋のゑれどこれをこそげまの内ようてねまぜねばならぬ。是は
そくいにかしまぜあのぎれの内へ入べし一夜ふいも
一ちりぞれの茶茄子のへたと葱とをせんであらひてはまた六月六日十六日
廿六日に猫蒜をつきこぐらいしに日かさしを重ねの赤りやけふまりぬるてはは
一粉刺のくすり客陀僧を粉にしてしるに乳味にてこれはさ白にぬりかくる
日あらひさらしに日夫度ぬまばいめるべく
一あせものくすりちりめんぐり貝をやきうどんのこをまぶんまぜ布につくこふひ
うけくしは一髪ぬるる時の茶かやくるべく例柏茶はこをもかしてし
髪あたにつくバ髪ぬけば一ちりがをそむる茶黒大豆を弱すてせんで
びんあふつふべし又もざくろの皮をせんでびんあにはうひくよう
一面疱のやまひは白附子を酒にひらしあるつも
妙べし一冬瓜の実を粉にして丸じつるに抜せんで面白くなること妙のごとし

色ろきあ中ハのちめべし
一秋ひもれてふ使ひしはは被切紙茴香二味等分粉にしてさゆるべく
のちめべし右のやまひハ医者にたのまでそこのこしうべ

九　茶ちりのかしらの中ハ
一油のふ袖ふつきこるふハ水一升に酒一合入よくうるしのしめ面をぬべし
又ぬるちりのこるびかりそもあにつるこあるうぐ紙のあるべきこふるう
せきこの粉をふりうけ紙をしき火のしるくびもあるれハ油ものるあり
こじのあんハちびくるみにあぶるのつきこるハ食ぞくいをぬるかりしを
うけ重べし又ぬりぞをふりうけてもつるく紙ふつきこるふるうけの粉紙
ふりうけべしあるしきあのそにつきてあるもをぬあり
一墨の付るふ芋茎のせんじ汁白米のせんじ汁米の弱のせんじたるを
いづれふくあらひてもおるべ又ふくこあてあらひものくこ小田うあをこ色ん

こあらうれいがあつるまでゝあひなうそのあふ

一まつのあくにあつをうつしてそうれうさのあるこのうゝをいたけるゝん

一ちぶの付るにはこうしんをせんじあらふべしあるにくあらふべしあらふべしあるこのあくにくあらふべしゆうのぬりあくあらふべし

一とうのちの付るふにごだゆうのぬりあくあらふべし

一おそごろの付るるは米の弦をせんじあらふべし

一血の付るふにを善をうすくへぐうふかけば血うつてあつるくあらうれのるつきるふとうしんをつぞれすてぬしにもるべし

一魚をるの血油の付るにはさのけるあくあらふべし

一紅ぞめあるぞあるぞふ色のやくやもるふにあらのもそせるく

一うるしの付るふにみそをるをせんじてあらふべし

一あるの物をおくにふにあるあくにはぶにあつるなり

一紫ぞめをおとにはふにて煮はぶにあつるまつ

たんのかゝるみたこんのあらりしるるはあるこ

りのあつ

�十　女中把刑のうぞ四ぶんあくにうけべきうの

遠刑のうぞ八徒女八后妃小の方髪中といはるゝ麿も自ら色のあひしくく

後世ふ八五刑師刑宮あぞてあること控紀臣民の妻女八一日もかくまぞ紀

はとあくこ功ちあるる女中にうう何のををても把刑のうぞ八色ぞけあふべし

あくんを決ゝ男女のあぞもにあぞれあらひるる衣れをうせあくに妻を人の

恥となる髮の衣れせんくあくれ夜のをまでゆぶんあくををらぶにんぞにし

うくぬゆくにぶぞつるは妻れをくにあり愛女るるの今れまに人の妻と成

妻八元奥隠居とあるくゝ番附ぶるくかまれもうぶうけくゝ笑ぶれぞ

後悔くくせんあくいさうゆぶんあくあひもぞえあふべし

女重寶記 四の巻

菊葉假字

日本紀抜書集本紀の古出こしらる
和歌をしらしるよみくせ侍ざれハ初ゆ

い
知智池遲馳
以伊已異
怡易移夷

ろ
呂侶路露
稜會廬蘆
樓漏

は
波破半判
絆巴播幡
薄八方伐

に
爾邇二仁
邇而珥尼

ほ
保褒木寶
富朋賽報
譜苦

へ
又返閉敝
幣篇遍陛
覇珮背沛

と
登刀斗等
苫覩鄧騰
得德度妬

ち
陳稚致恥
撥答治尼

り
利梨里理
璃隣喇

ぬ
奴怒弩
農濃ぬの二字用

る
類累屢樓
盧蘆

を
袁遠乎呼
弘烏嗚悲
越叫悅廻

わ
和倭王涴
廻輪丸

か
伽可河何
禍鍋珂舸軻

よ
容欲庸遙
譽

た
多哆丹他
柁駝當黨
囊儻太

れ
禮例戾黎
連憐聯

そ
奈南難那
娜丁多

つ
濟詐且祖
則宗諸鎮

ね
祢年尼泥
塵涅佞

ら
良浪羅邏
攤囉樂

む
武牟無毛
務霧要鶏

う
于宇汗紆
烏有雲禹
羽

ゐ
威韋偉渭
謂井居

の
乃迺能

お
於淤意億
憶飫乙噫
應磯

く
久玖九鳩句
約君苦空
紅倶區孔

や
也夜耶椰
娜瑯楊野

け
計介氣比部
奚雞谿迦
價誓希啓

こ
己許古胡枯
姑枯故居固

て
天弖低底庭
帝諦提
弟代題田

ま
末万満馬
麻摩磨魔
麾莽

ふ
不不昂副扶
負敷浮輔
賦俯府赴

え
依叡哀埃
愛兄

あ
安阿婀歎

き
吉記紀枳
企寄寄綺
幾支伎岐

ゆ
由遊游史
庾愈喻踰
瑜

め
毎梅味面
綿毒迷

み
美弥渺未
味尾微弭
寐民見

し
志士仕之芝
師四斯死旨
指始信進

ゑ
恵衛回隈
繊會繪

ひ
比毘非悲斐
飛心秘被
肥脾賓碎

も
毛母門聞問
文目物勿
茂忘蒙謀

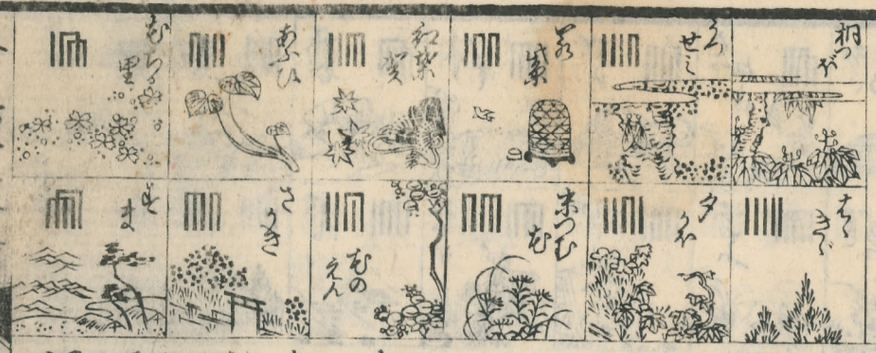
せ
世勢齊劑
西栖細是
筮噬

す
須春周主
取素數洲
秀珠殊輸

女重宝記 巻之五目録 女部用字尽

一 女用装束の部　源氏香の図
二 同　夜具の部　小袖系流万色やう打敷の部
三 同　絹布の部　熨斗　板の物
四 同　茶漆の部　箸　色紙
五 同　紙字等の部　うんざく　扇
六 茶道具の部　茶巾　香包
七 宇漆保物の部　かわひ袋　手のごひ
八 うるづうしの部　墨　筆　唐草風呂敷
九 八百代の部　切抹粉　弓の法
十 新大和言葉　紙のとけ
十一 女中名づし　二字名女性ゆかせるもの

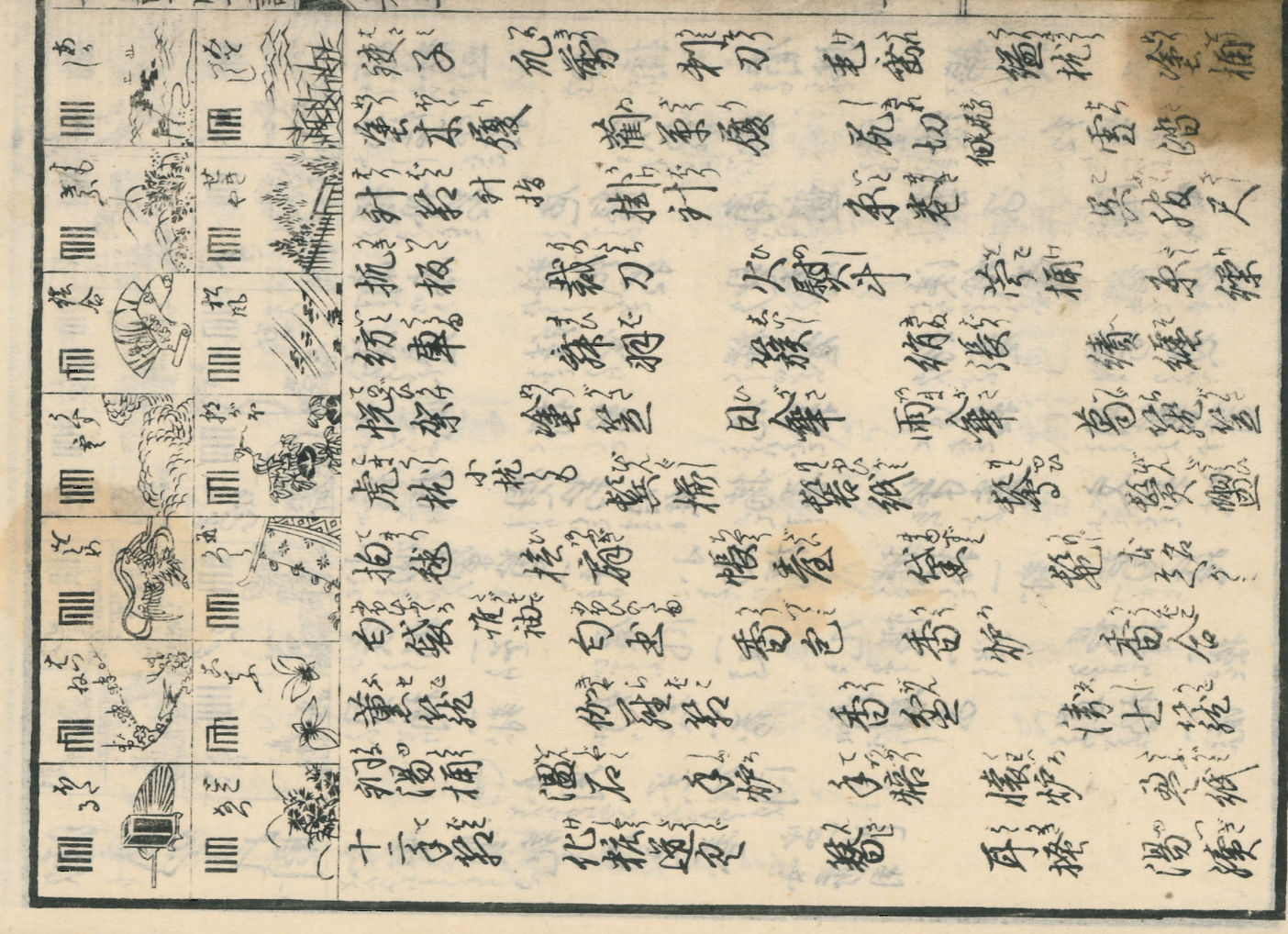
源氏かう九図

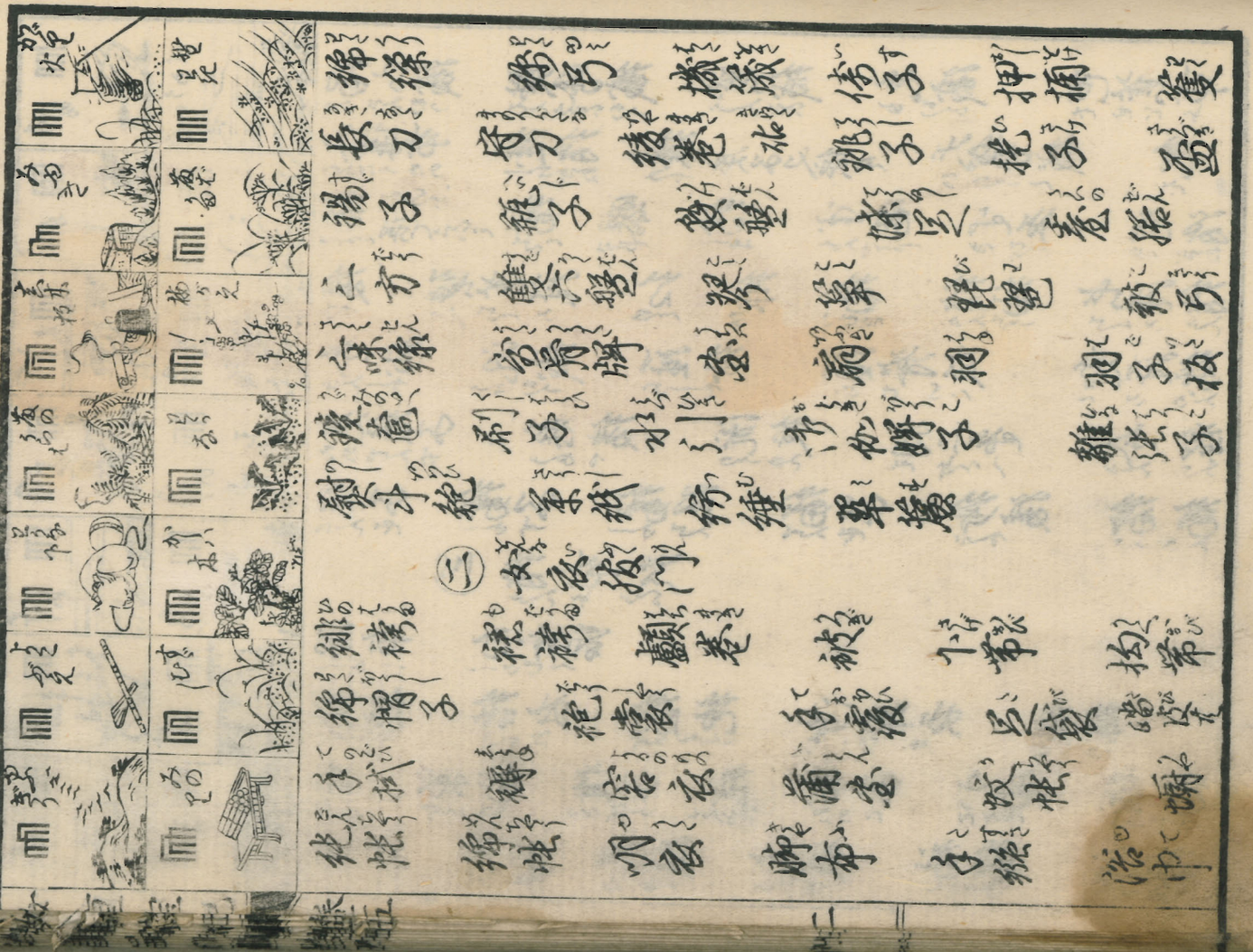


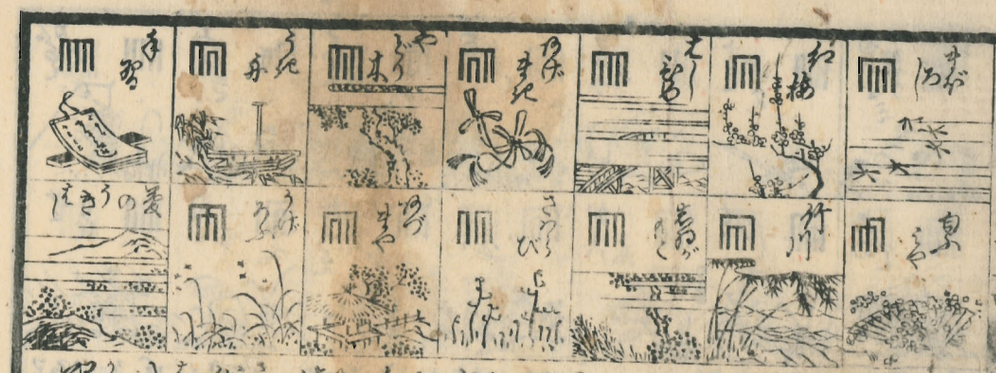
女重宝記 巻之五 女部用字つくし

一 女用装束の部

貝桶一対　沙羅一荷　御厨子　黒棚一流
衣桁一本　屏風一双　几帳一張　長持一棹
小袖箱一重　小袖櫃　投扇一対　葛籠
荷桶　硯箱　硯蓋　文箱大小
文匣　櫛箱　机箱　手箱
硯蓋　硯架　櫛蓋　粉蓋　用箱
蘭赤　料紙箱　見蓋　決紙蓋　寄越箱
懸帯箱　色盤　南蛮　張子　渡金
八結子箱　鉄漆壺　漆壺　和粉筆
粧粉四　油桶　眉掃　掃枝　張子







絵　呉須　上服　袖補　汗衫
菓拙　帷子　裙　布子　小袖　振袖
結衣　褶袍　浄衣　襦袴
欽板
湿布

（三）
絹布　北
紙子　絹張　絹子　紗綾　絹縮
燭子　羽二重　金襴
光綾子　兎綾　流紋
合紗　汎織　羅紗　羅脊板　唐織
綾　紅　緋　紬　絹紬　七織　絹
八傳布　結　湯てさいし　縮　縮　寸西　寸平　寸消
粉山織　縫　庚子又綾　天鵞絨　紀
樊噲織　雲織　毛織　芭蕉布

綿繰　長刀　機織　倩子　押桶　簍
綿弓　守刀　綾巻　挑灯　挑子　盃
瓶子　桃子　数珠　妹子　壺
瑞子　雙六盤　琴　琵琶　鼓弓
二方　宮骨牌　壺　扇　羽　羽子板
二味線　刷子　水引　寺仏牌子　雛張子
鏡奩
熨斗紙　菓紙　紡錘　翠簾

（二）
女衣　袴門
緋袴　裙袴　顱巻　被　下帯　拘帯
綿帽子　袍裳　手袋　呉袋　帽子
手拭　褥　宮衣　蒲壺　牧帳　小屏
純帳　綿帳　明衣　脚布　手縄　浴衣

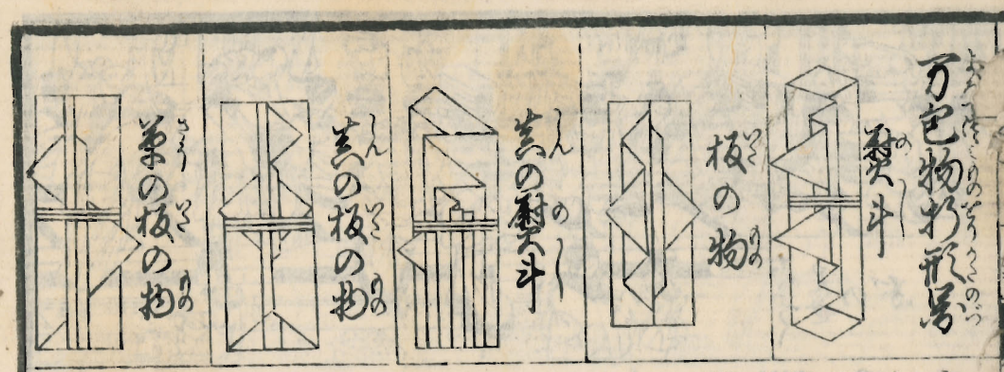
手帋　紙子　呉絽　上服　袖標　汗衫
袷　茶染　帷子　裙　布子　小袖　振袖
缺袖　結衣　縕袍　寄衣　襦袢
湿布　白妙布

（三）絹布部

繻子　編子　編羽　編子　紬綾　紬縮
紋子　流紋　羽二重　金襴
岩綾子　綾子　羽二重　金襴
金紗　汎織　羅紗　羅脊板　唐羅紗
綾　練貫羅　紅　緋　紬　紬紬　長羅紗
結　浪てさいと　紬　縮緬　紬　晒　寸平　寸法
八寸布　結紬　綵　戾子又綾　天鵞絨　紀
鞠山織　樊噲織　雲織　毛織　芭蕉布

ぶふくしんせの部

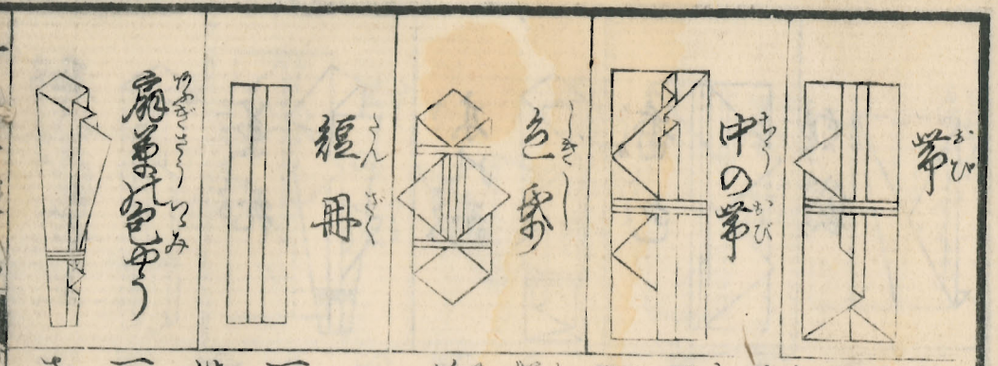
綿　海紙　紫丸　小紬　寸絲　繞　琥珀
練糸　縮糸　花紋綾　柳條　織　羅　繡
綺　麻　布　紙布　和金丹　厨子目　猩々緋
西洋布　蜀江織　博夫絲　花縮　傍蒼判紬
印義布　糸織　欧羅西紬　青梅　掖茂　古織
結城　小柳　山蘭　紹　呉羅　大官丸　桃山織
紋羽　紗　紀梅絲　津綾　丹後紬　上田紬　八丈
青八丈　甲州八丈　秋田紬　田中八丈
博多織　岩紬　加賀紬　唐縮緬　伊勢紬
越後小千谷縮　京都近江晒　風通絲　河内木綿
岩槻木綿　上州縮緬　丹後縮緬　秋田紬　二子紬
紙子　上総木綿　唐木綿



縫箔　熱麻子　幅　幅紐　袴　緯　裏　襠
袷　繊　裙　袖　袿　襠　袍　袴　袍　袴　衣
紋　縫袴　縫袴　紋　紋　紋　紋　紋　紋
紋　紋　紋　紋　紋　紋　紋　紋　紋

四　茶染色の名

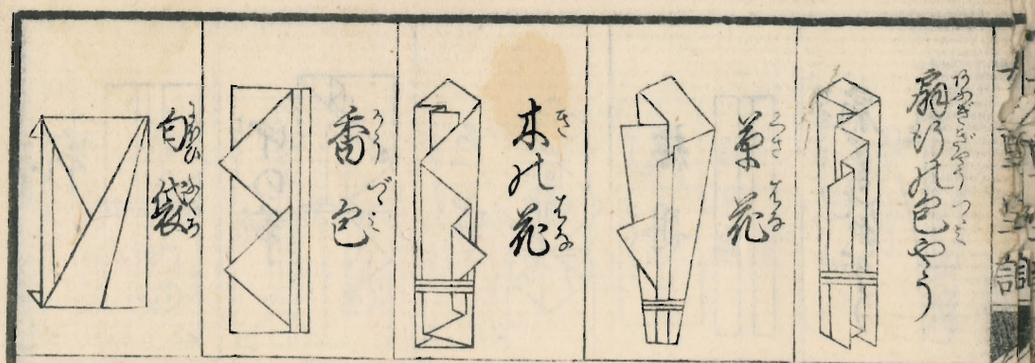
緋　平安色の紫　紫　間色の紫　紺　花色　花田　濃黄
色　櫨色　黄櫨色　蒲黄　黄　黄櫨茶
千歳茶　櫨茶　藍海松茶　櫨竹色　濃櫨
薄櫨　晒櫨　常茶　鶯茶　媚茶　宗旦茶
卵色　朽葉色　木賊色　江戸茶　樺色　鬱金色
梔茶　梔色　百入　江戸茶　藍　江戸　狩衣　藍媚茶
鉄考茶　苑染　藍　榜染　桑茶　鶯色　萌色



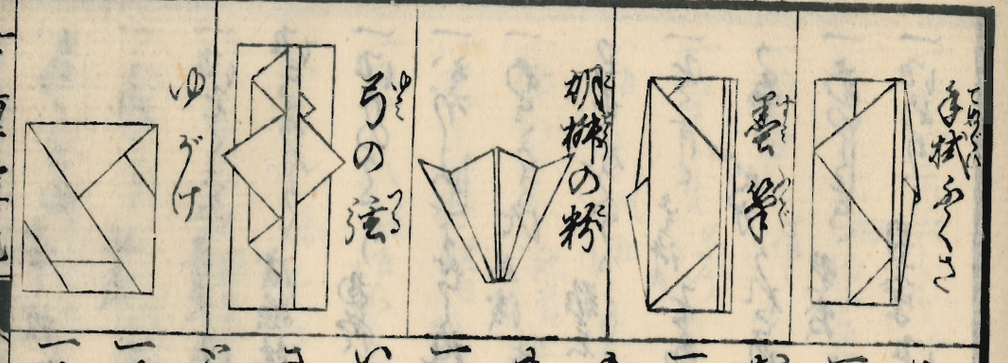
萌黄　仏茶　樺皮色　青色　黄色
山吹色　鳥羽色　秋茶　秋茶染　狩衣　柳色
正平染　紫染　藍茶　藍茶　藍茶　藍茶
紫染　紫染　紫染　紫染　紫染　紫染
縹染　縹染　子茶染　黄茶染　加賀染　八文字茶染
藤色　紋染　紋染　上代染　葉菱　四方
絣　桔梗　蒲萄鼠　浅染　小紋　唐染

女訓字号　正字

一　あくるの新玉　たつたる初春　年の内のちぐわ　年始
法さし　決ぬ春　不老春　立春
一せんすじ　先文字　せんど先変　ひとひ一日　いつぞや　日不
さいつころ　去比　その内　ちと後　それ　うのち　近頃　近日



一はかをはかるまづさ五章はこれをはかること五つ
はせうそこ清泉はひとつ接はいたのあと筆跡
一ひきぐ〻ろくうるしゝ漆ゝ麻こまぐしゝ麻ゝ麻
はりのどを物をうちうえ打絃うえぐしゝ絃ゝ麻
うを麻ぐ〻離ゝ木ちぐ〻遠ゝ中ちる〻猿ゝ中ちゝ世ゝ
一はは四ちゝ麻麻はあつちゝ懐ゝ麻こひゝ意麻
はあちゝ墓麻うゝしゝ神ゝ麻あれゝ刷ゝ麻
一さゝう紋たゝはぎ紋びんぎ紋宜はさゝ古
一うけゝまうゝ承麻さうまわゝ当る歌
一あれは絃さゝ山ゝはつきゆゝ山ゝは乱はる
あちし絃シつぎは流ゝ月てはるまゝ又さゝは物
さ紋わぐ先絃さわぐ先文字いせん巻さゝふ先



さはせん寛麻はぎつるころ四比はうゝ巻方
一うゝ巻ぐ〻遠ゝうれぐ〻揉ゝうゝ〻揉ゝ
あゝ長押遠ゝ方ゝ〻ゝ方ゝ〻ゝ第ゝ実ゝ篠ゝあう
一ゝさゝれ方ゝたはまる結ゝつぐ紀載ゝたゝはう物紋
のゝひ姫潰ゝやる遣ゝつゝ紀生はは望ゝあゝる結ゝたんぐる毛
はあゝ毛ゝはゝ未毛はは毛ゝあゝる上あゝ結毛あゝりゝ結ゝ
一さゝゝ毛ゝゝびゝ麻ゝ麻ゝせゝゝ切ゝ麻ゝはゝ麻麻ゝはゝ
いゝゝあゝのゝゝ名ゝ麻いやはゝ泳結ゝたげゝ繋ゝいゝゝ毛ゝ
さ四ぐ〻格ゝ麻ゝ麻ぐ〻麻ゝうぐ〻数ゝ麻四ぐ〻種ゝ麻四ぐ〻細ゝ
ぐゝぐ〻結ゝあゝゝ四ゝゝやゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
一はひま使はゝゝ四麻はは毛麻毛麻はあそび遊
一みゝゝ四ゝゝ格ぐれゝさ四結ゝごゝゝもいづれ行義

一おのゝさま方　大ぜいさま　大勢はうあいさま　家門はらうぐさま　百人
一うれゝく　歓喜　よろこび　悦　せんぞくはぶ　こうとけ　元服　ことに　祝儀
一はそくさい　息災　はぶゞ　安寧　あぶゞ　安泰事　まあぶ　息災　けあげ　元健
はさぐんよう　樣躰　はくんで　堅意　かまうあく　安堅　べつぜうあく　安別条
一はのぐうう　面部　はそ　色　吐　はうつさ　喝　はまし　中　はつえ　伺　ことゞて　元伺
一おゞゝめよせれ　意右衆　はうろあふけられ　元　元敵　おめ　まあづう　敬来
一あさうゞて　不議　あのあ　あゞて　不斜　ひゝれ　一入　べつゝて　別白
ろもれぐゝ　親元　いやめづゝう　冷孫　ろんぐゝ　兄事　いつしき　英愛　うつしく　英愛
一ちこすく　生詳　ちあさ　生方　そのちう　生方　うつうと　生方　こあくゝ　生方　このちう　生方
あさ　彼方　うれられ　彼色　あち　西風　ろち　東風　あそこ　彼面　ろゝ　此面
一あいしさ　老衰　おあしさ　公儀　朱衆　いろけ　懐中　おんべう　神妙
一はりゞ　見文字　はぐん　見　げんざん　見　はわこえ　目見　めどちう　目通

一あふせのおくく　出仕　はまし　のこちう　中通　はつえつけのぐく　出身　はのくちぐく　出目録
一こまうに　細　つぶさに　具　つまびゝかい　一二　くゝ　委　ここまう　事細　つぐまやう　約
一ゆるゝ　遠　こうろしづふ　公静　おらぐ　遠　ひぐゝ　慧　ようゝ　時
一ゝいま　只今　ちやくゝ　まゝ　いちちやくゝ　完了　こみに　故　こちに　儀
一はちも　彼　はとりあひ　体　いざあひ　誘　はさちひ　誘引　はつれぐち　連色
一はちちう　親老　はやんちう　奇老　はのて　家　はうちちゝ　名嶽子
一おうゝじの　後日　ひゝうす　後日　くゝまで　暮　ゆふべまで　夕方　ちちがれまで　黄昏
一はいちひ　祝　はちぐき　壽　はちふぐ　祝義　ひぐこと　慶　うりあくに　不元敬
一一ちん　一番　ちきこと　遠　さうに　更　うつて　勇　うひて　勇　方方のこと　様子の字
一さうぐこに　親老　のぐれぐこに　親道　うあちる　不叶　ようぐあさ　元祝義
一はいそぐこち　帰宅　はこちばさ　事整　はうちこち　元色　ちりまざれ　元祝
ちうみざし　見乳　はようおゝく　用事　こんぐう　混雑　はむづゝく　六十義

一めづらしき孫まれなる事なり　事なき大せつ大切なるふまうの従何　ちうそうそう　重宝
一ちいさきあぐらなる　さんぐも　ちいさき有たく　さうあぐら　ちいさく　実ハ有たく
一ちいさし　小時　ちいさくく　皆　ちいさく　今少　四めだうう　爰ニ　つ四だうう　寄ニ
一おやうく　大分　あらく中　ちいさく　あらく　あらく　ちいさく　ちいさく　荒方
一やがて　ちいさく　ちいさく　ちいさけ　延付　わどあく　ちいさく　ちいさく　内
一ちいさんぐさ　延年　ちいさく　若年　ちいさん　合う　寿年　ちいさく　ちいさく　紀
一ちいさう　牧畜　ちいさう　ちいさし　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく
一ちいさく　かけいひ　粗微　ちいさく　ちいさく　勢　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ニ
一やちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく
あんざん　安産　ちんあう　延生　ちいさく　ちいさく　ちいさく　肥　ちいさく　ちいさく　ちいさく
かんぢあう　看病　よちぎ　疾病　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく
へいわ　平倉　へいぜいのしちう　平生　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく　ちいさく

⑥ 業花抄後の同類

月の宴　一　花山院の中納言　二　さくらの枝　見たくぬ愛　四
浦くの別　八　かやく　蔵垂　六　雪辺　七　初もち　八　石蓮　九
同蓮うづく　十　蒼也　十一　玉の村雨　十二　夕幣　十三　淺緑　十四
鏡　十八　りせの琴　十六　春楽　十七　玉の春　十八　江霞　十九　江宴　廿
後悔大切　廿一　春の舞　廿二　約競　廿三　ちりぢり　廿四　重月　廿八
楚王の愛　廿六　夜の珠　廿七　ちの水　廿八　玉の簾　廿九　梅の林　三十
殿上の花見　三十一　歌合　三十二　切ハつとび　三十三　晩梅星　三十四
琳の琴動　三十八　根合　三十六　猿の後　三十七　松の緑枝　三十八　布引滝　三十九
紫野　四十　しれ物　今版本同類　寛永年中より　延宝院寛治六年　三百年　巻　天白
乃長　紫色のとこらう　花ちらせう　赤染清つの　他　伝説　他授なく

利ひづとし一説に桐壺帝為業伝とし一名世継物語とも云ふ

七 宇津保物語の目録

一 俊蔭　二 藤原の君　三 忠こそ　四 楊の花笠　一名吉日伝

五 源氏院　六 吹上の上　七 吹上の下　八 祭の使　九 菊の宴

十 あて宮　十一 初秋　十二 田植の翁　十三 蔵開上

十四 蔵開中　十五 蔵開下　十六 楊の上の上　十七 楊の上の下

十八 国譲の上　十九 国譲の中　二十 国譲の下　内侍宣二十巻二十冊

源氏絵合の巻か物語の花かうるおの俊蔭の巻とあハせてとあり清少納言の

枕草紙か物語ハ但右うるおの巻とあり源氏物語のふ源順の作といふ説先物

の考に時代の物考行宮とゝいづ婦女のゝみのふべきものの志貝物とゝ云ひ

源氏の目録ハ此ものゝ目録の書の如くあり宇つほ物語ハ

まゝ二十四巻紫式部の作今湖月抄本号本さゝめぐ加ゝ六十巻とい

⑧ うぶづうひのるい

古今集のうちを今ぐあと云第集の此ように歌こうけ故事紀日本紀よ
歌あどある歌を古ぐあと云ものをもくべしてい学べ今
ぐあの日清唐紀年嚴檀あど字書んとそぬる歌わの字をもてをとむ
古ぐあの八年梅こるさを今ぐあの梅生る古ぐあ八うめうまるうまる
いろはのちぐめのをい小弟小海小門の歌おくのをい大弟大井川大江山の歌
じくの古も今も似られを今ぐる伯父叔母古ぐあ八をぢをば萩の古ぐあ
をぎのとぶ鳥いろはの中れいをねとそれの字かをえとを墨てをくもを字の
をを見ぶもいじくこと紙おおん見ることを見ることを学ぶこと消の歌じ家一家
おくの歌いこを歌ずを歌一をちぐめのいをかくい小をいと書にゆむ字らいをい礼物
あい門さい細らい来らい雷式部ハおい歌をこい紀おくのねををハくねる位
くるる馬芋くのね芋井今ぐあこのかくるあ下のあくぐねるあを宝むひをいと
古ぐあへらゆるひくひ

ようむい歌紀歌の歌又八夢の字八下をふとを宝めくけくのれ女中八さくく
をのこも字をちぬ人いつひあやまりてちぐされぐかつひ八紀文学ぶを達せ
ざれい大学ひとぐうも学ぶあくうあ付んとけび字の日書をちる八学ぶ文せひば
初りせうをようむ方もちぬじくく不学ぶを歌れ八海くくうをを歌ふをべきハ
祝法臨集業切八蠟意揮夕納豆芋塔豆粒泡色
の歌おくあ八夢ぶを歌うとうびを歌ぶを歌女中ハ芋泡くく

⑨ 八節供のるい 付くうか 文のるのるい

正月七日　とるのせうくくふをくくけのをとをぶに書る日八せくくくいふハ こぎやう　ちこべうう
やくけのさ　すぐる　ちじろ　せうあぐな　書わうけのさくくたびくをくくを
二月三月　のけせうくくとすのうにて八武日ふくくすあのえんくそれ四ふさうきをなりぐ
ぶのまをすぐぬまに清ちうあそぶくりり日本中もめくうぶのちら歌あくと
六月六日　ちめのせうくくふあやめ菓をみすきちやくくく戸かくれば
一年中のじやくをちらふくくくくりあやめ八菖蒲のくと
七月七日　くあをくまうくふ織半織女とふ船のあり一度に会くとひあやくくくり
きうくうでんともそれびひのくをけかくれ紙くを琴琴のくくのあぐのくくあり
九月九日　八百年のようをひをくうちくくを云うろくくのあぐくれ代日をくくのをうをのく
くくふ友事あく

右之人前佐とは八郎氏わく十月のねのこと　女中とうとけいたふべき日なり
りうにの楊貴妃と云人十月丑の日　玄宗皇帝のれ
ちうこうの法をえうう　元女のふの比　あやうんをそなんぢ日にのりをつ　元いたひ
るるひ今ふつさり　丑のこと　おづくこと　又あうら　狐小豚　生ゆく　育ち子　多くこうむ　初産
丑の月　丑の日女　別て　祝ふ　十月　丑の月　くたびめれ　祝　丑　丑ば子のもち　祝ハ　豚

十　新やすこと　云　禁　敬　祖のうけ

一いのせとハ　ふうふをいふ　一いざよひ　十六　新　一いそはとハ　中　えうを云
一いさうふとハ　うをとるあと　一いあをせぬ　五　ひせぬ　一いきすをとハ　うゆひを云
一いふむりとハ　ねふうを云　一ひとハ　あひをいふ　一いろねとハ　いのくをいふ
一いうできとハ　ねゆうこと　一いつでこと　うやげのこと　一いのまでこと　あがをいふ
一いたこまびとハ　たらはる女　一いぶせをとハ　ぬりをあを　一たらかとハ　ふをこのひと
一たふくちをとハ　苦を　一たふいち　うるひやとき　一たうう　夜とハ　月あをこと

一たうきでとハ　ひをこと　一たうくうこと　意する人を云　一たあでれ　ちびとハ　ちのこと
一たふうこと　うんの　一たうつげこと　梅の　一たう代　二月　たれ
一たあでこと　たあいうかこと　一たあのこと　いやをを　一たあのきみ　うをつをこと
一ふけあをとハ　ふうねをいふ　一ふねまこと　はじめてちを　一ふきでとハ　意すること
一ふほひあをとハ　こびすをいふ　一ふねてをとハ　こづうこと　一ふあをとハ　ふひあを云
一ふくあひとハ　ふあをこと　一ふのひとハ　ひをあを　一ふのめくとハ　たかあねの
一ふをとハ　ふうかの　一ふこうこと　ひをのこと　一たうこうとハ　つをこうを云
一ふをこと　松の　一ふのうとハ　はてんのをこと　一ふこうのこと　あうをれこと
一ふこうとハ　ふをこと　一ふまうをとハ　つあれを云　一ふいうのうをとハ　ふうをこと
一ねつくとハ　神　一ねをとハ　ひあをいふ　一をちこと　意　道
一ををのこと　月日　一をこのとハ　親人のいあこと　一をこをとハ　女　ひをこのこと
一ふこうこと　海の　一ふうこと　海神　一ふくこと　ふあをこと

一ひとつ　やとこ　おとこ　ふたをいふ　一かくれとこ　あいぬをいふ　一うとうれ　ふたりとこ　ようこあきをいふ
一ちやぶるこ　神くいこん　神こそ　一うじごきこ　あふひのこと　一うどこ　うとやくそく
一ほんまつ　やなぎこ　一かぞいろこ　ちちをいふ　一うつけこ　月のひかりこ
一ようひごきこ　おくんのちなこ　一ようすごこ　たうれこ　一たこ　ちをこ　ちをいふ
一ここ　ちわこ　ちをいふ　一こもまち月こ　十七夜の月こ　一こもまち月こ　十七夜の月こ
一こもおこ　おちけまこ　一こもぬれこ　一こたぬきこ　夕がれこ
一こごきこ　りんごをいふ　一れいあこ　ぬこ　ぬこ　ぬこ　ぬこ　ぬこ　ぬこ
一そこ　ろこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ　ふこ
一つもけこ　一つこじこ　一つこじこ　あこ　こごこ
一ほうけこ　あこきこ　一ほうこ　一ほうもち月こ　十九夜の月こ
一ほうやけあこ　ここをいふ　一ここけこ　こけこ　一ちばきこ　一ほうしきこ
一ほこごこ　ねんこ　一ここ　ここ　一ここ　ここ　ここ　ここ　ここ　ここ　ここ
一むこ　ここ　ものこ　一むすこ　こ　ふこ　一ひこ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ

一ひこ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ

一やなぎとハ　かぐらゝ　はなびなど　一ねさとハ　神の江へいとふ　一まあさとハ　ちゝのあぶら
一ゆりとハ　さるたゝと　一ゆもゝとハ　ゆとこのこと　一ふそくけとハ　ひとよのちぎり
一ゆけまちゝ月とハ　廿日ゝ　一ゆうけげんとハ　いまごあひ　一ふのうとハ　ゝえぬ
一ゝてのことハ　ゝゝこと　一ゝどもゝとハ　ゝゝじきこと　一ゝず表の秋とハ　九月といふ
一こゝもとハ　ゝゝこと　一えびゝとハ　ぶゝゝこと　一えやことハ　やくびゝといふ
一ちゝとハ　ゝゝこと　一えすとハ　ひさゝゝ　一あゝもゝとハ　ゝゝぬ
一あやなとハ　ゝゝ　一あやめぐさとハ　しゝゝぶといふ　一あまもゝとハ　いまごあひ
一あゝらめもせぬとハ　ゝゝめせぬ　一あとゝゝさとハ　民百姓といふ　一あゝゝもとハ　天地のゆく
一あきらめまとハ　月日のこと　一あゝまとハ　ひじのくゝ　一あゝびとハ　ゝゝ
一あすゝの月とハ　ゝゝり　一あゝのねさとハ　月ゝゝ　一あゝゝゝとハ　地ゝゝ
一さゝゝゝとハ　猫のゝ　一さゝとハ　蜂のゝ　一さゝれゝとハ　こまゝゝ
一さゝゝゝとハ　ゝゝ　一さゝゝきとハ　あきといふ　一さゝもとハ　さゝゝ

一さゝめゝとハ　さゝゝゝ　一さゝゝゝとハ　ゝゝゝゝ　一さゝのうとハ　ゝゝ
一きぬゝとハ　ゝゝれのこと　一さゝすとハ　きゝゝ　一さゝゝとハ　二月のゆく
一きゝゝとハ　来て居ゝ　一ゆゝげとハ　ゝゝ　一わすとハ　あゝする
一ゝゝぎのとハ　秋の名所　一ゝゝのすゝのとハ　ふゝ　一ゝとのゝとハ　天子の御
一ゝゝびとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ
一ゝのずゝとハ　ゝゝ　一ゝのゝすとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ
一ゝのゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ
一ゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ
一ゝゝきとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ　一ゝゝとハ　ゝゝ
一ひさゝとハ　ゝゝ　一ひとの日とハ　ゝゝ　一ひのたゝとハ　ゝゝ
一ゝゝ月とハ　十ゝゝの月　一ゝのしぎとハ　ゝゝ　一ゝのこゝとハ　ゝゝ
一ゝゝとハ　ゝゝ　一せゝとハ　ゝゝ　一すゝとハ　ゝゝ

一すぐれよしハこゝろ

㊤ 女中名づくし　二字名ともに女性あらせたる

木性

福　巻　書　邦　英　芳　寛　武　末　等　民　本　門　級
百　万　文　繁　無　清　末　房　楠　妙　麻　博　弘　副
朋　留　寛　華　斐　波　達　演　毋　茅　坂　遥　斧　色　苗
浦　牧　保　義　世　義　世　八　百　八　十　八　重　八　千　八　百　八　十　八　重　八　千　八　百　八　十　八　重　八　千

早稲燭照塔揚圃俊業壮操熱宗象叢
村文頌松朔伍泄
新之書組初須紀
宋七紀玄昌正改
衆宣節若曹舎蕊
石秀用養十琴任
振清拾田柵桂陳
志賀佐堂佐宋佐代次賀次ノ勢十字十弥十和十根
千万千也千代千湯千堂千和之藤清和
高井蘭山著
應為榮女筆

編輯畫圖

弘化四年丁未初春

大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
東京日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛
浅草茅町二丁目 同 伊八
芝神明前 和泉屋市兵衛
本石町十軒店 椀屋喜兵衛
日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
同所 小林新兵衛
通塩町 内藤 恭次郎版